

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第四号  
平成三十年三月一日発行（抜刷）

資料

日本後紀史料（稿）

——延暦十二年——

史料編纂所

## 日本後紀史料（稿）——延暦十二年——

## 史料編纂所

## 日本後紀史料（稿）凡例

- 一、「日本後紀史料（稿）」は、『続日本紀』につぐ勅撰の歴史書『日本後紀』を基軸に、関聯資史料を併載した編年史料集である。対象とするのは、『日本後紀』が網羅する延暦十一年（七九二）より天長十年（八三三）の四十二年間である。
- 一、史料の排列は、先行する『続日本紀史料』を踏襲した。即ち、同一記事では、冒頭に『日本後紀』を置き、以下、原則として『類聚國史』『日本紀略』『扶桑略記』を排し、さらに年代記・記録文書類等の関係史料をほぼ成立年代順に掲げた。
- 一、ただし、『日本後紀』は散逸が甚だしく、現存するのは全四十巻のうち、巻第五・八・十二・十三・十四・十七・二十・二十一・二十二・二十四の十巻であるため、これらの期間については『日本後紀』の記事をそのまま掲げることが可能だが、それ以外の期間については、『類聚國史』『日本紀略』などに残る『日本後紀』逸文によった。
- 一、『日本後紀』本文については、三条西家本を底本とし、朝日新聞社本・新訂増補国史大系本・訳注日本史料本などを参照した。
- 一、一々の史料について網文を立て事実の概要を示し、読者の便宜とした。『日本後紀』若しくはその逸文が存する場合はその文に準拠し、併せて『日本紀略』前篇を参照した。それ以外の史料によって網文を立てる場合も、努めて史料中の表現を用いた。
- 一、歴代天皇及び朝廷の記事は、原則として主語を省いた。人名に係る官位・姓は原則として記さないが、薨卒記事には官位・姓を、賜姓記事には姓を附した。
- 一、木簡・金石文等の断片的な史料や、年月日に係けて網文を立てるに至らない史料等は、「雑載」として、是月条または是年条に収めた。
- 一、年紀に諸説があるものや、内容の真偽が定まらないについても広く採録し、注記でその旨を断った。
- 一、引用の史料は、信頼のおける校訂本がある場合はそれにしたがうが、『三代格』『東大寺要録』など、主要な史料については定評のある古写本にあたり、字句を確認した。依拠した写本については、史料名の下に注記した。
- 一、「参考」には、参考とすべき史料を掲出したが、本文掲出は最小限に留め、他は史料の所在を注記するにとどめた。
- 一、上欄見出しは、主に主要用語を掲げ、ほかに便宜、史料を要約して参考に供した。
- 一、史料本文には、可能な限り句読点・返点等を附して、参考に供した。
- 一、編者が注記した文は、首に○を加へて史料のあとに掲げ、また原文中の傍注等には（ ）を施し原文と区別した。
- 一、原稿の作成には、遠藤慶太（延暦十二年）があたり、全体の調整は荊木美行と遠藤が行った。なお、素稿の作成に関しては、川合洋子・橋倉雄二氏の協力を得た。

延暦十二年癸酉（七九三年）

正月 大盡  
庚辰朔

一日（庚辰）大極殿に御して朝を受けたまふ。侍臣を前殿に宴し被を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歳時二 元日朝賀

（延暦）  
十二年春正月庚辰朔。皇帝御大極殿受朝賀。宴侍臣於前殿賜被。

〔日本紀略〕 前篇十三

癸酉  
十二年正月庚辰朔。皇帝御大極殿受朝賀。

二日（辛巳）大雪ふる。

〔類聚國史〕 卷第六十五 祥瑞上 雪

十二年正月辛巳。大雪。

三日（壬午）宴飲して五位已上に物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

十二年正月壬午。宴飲。賜五位已上物有差。

六日（乙酉）勅して、内外五位の處遇を等しくし、位田・位祿・賻物・蔭階・資人は前例に因修したまふ。

〔類聚二代格〕 卷第五 定内外五位等級事（金澤文庫舊藏本、宮内廳書陵部藏）

〔龜頭朱書〕

「弘格二式上」

勅。惟王建國。制軒冕旌賢。惟帝念功。設爵賞以御衆。用能翼亮洪基。弼諧鼎業。詳觀列代。咸皆由之。省去神龜五年奏。五位已上子孫。累世冠蓋。及明經秀才。堪爲儒者。即敍內位。自餘先敍外位。積勞入內。其外位々祿・位田・賻物者。給內位之半。女減三分之一。蔭子之階。正五位嫡子從八位上。庶子大初位上。從五位嫡子從八位下。庶子大初位下。並補大舍人。不任內舍人。位分資人。正五位五人。從五位四人。女亦同。是所以下分別內外。差降品秩也。其自外入內。敍當位之階。則優昇超次。僉議未允。至於行刑之日。不聽辭訣。論子之科。不須蔭贖。則貶抑過甚。有乖條例。如此事類。往々不隱。夫五位者班列大夫。蔭及子孫。朝廷攸重。人望斯在。而勞級雖貴。禮數猶卑。褒德勸人。豈合如此。古人有言。爵不尊祿不重者。不可與圖難犯危。以其道未可求之也。宜不隱言條。並從除去。但位田・位祿・賻物之數。蔭階・資人。因修前例。主者施行。

延曆十二年正月六日

〔弘仁格抄〕 上 格卷二 式部上 (九條家本、宮内廳書陵部藏)

勅

延曆十二年正月六日

七日 (丙戌) 五位已上を宴して女樂を奏し、祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

丙戌。宴五位已上。奏樂。賜祿有差。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歲時二 七日節會

十二年正月丙戌。宴五位已上。奏女樂。賜祿有差。敍位云々。

■  
敍位あり。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歳時二 七日節會 (大永校本、前田育徳會尊經閣文庫藏)

十二年正月丙戌。宴<sub>二</sub>五位已上<sub>一</sub>。奏<sub>二</sub>女樂<sub>一</sub>。賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。

〔類聚國史〕 卷第七十一 歳時二 七日節會

十二年正月丙戌。宴<sub>二</sub>五位已上<sub>一</sub>。奏<sub>二</sub>女樂<sub>一</sub>。賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。敍位<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙戌。敍位。

〔公卿補任〕 延曆十二年・同十五年條

(延曆十二年)

參議 從三位 神 王 彈正尹。下總守。正月丙戌從三位。

(延曆十五年)

(參議) 從四位下 和家磨<sub>三六</sub> 三月一日壬辰任。七月廿八日正四下

(中略)

延曆五年正月七日從五下 (中略) 十二年正月丙戌正五位上。二月兼治部大輔。四月庚戌從四下。五月兼大和守 (大輔如元) (後略)

(中略)

從四位下 紀梶長<sub>二四</sub> 正月七日任。兼式部大輔。後改名勝長。右兵衛督。造東大寺長官。美作守

(中略)

性潤有雅量。好愛賓客。接待忘倦。饗宴之費。不問出入。步射容儀。應爲師模。但至犬馬翫好之物。不免嗜欲也。(中略) 十二年正月丙戌正五位上。

五月辛巳兵部大輔。(後略)

〔日本後紀〕 卷第十三 桓武天皇 大同元年四月丁巳條

(二十四日)

丁巳。(中略)是日右大臣從二位神王薨。(中略)十二年授從三位。拜中納言。

十四日(癸巳)三十九僧を宮中に請ひ、始めて藥師經を讀ましむ。殺生を斷たしむこと七日なり。

〔類聚國史〕 卷第百八十二 佛道九 禁殺生

桓武天皇延曆十二年正月癸巳。請卅九僧於宮中。始讀藥師經。令天下斷殺生七日。

十五日(甲午)藤原小黑麻呂らを山背國葛野郡宇太村に遣し、遷都のため地を相さしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

甲午。遣大納言藤原小黑磨。左大弁紀古佐實等。相山背國葛野郡宇太村之地。爲遷都也。

〔拾芥抄〕 中 宮城部第十九(前田育徳會尊經閣文庫藏)

或書云。延曆十二年正月甲午。遣使於山背國葛野宇太村地。爲遷都也。始造山背新宮。

〔帝王編年記〕 卷第十一 桓武天皇(國史大系)

(延曆)

同十二年癸酉正月十五日。始造平安城。東京愛宕郡。又謂左京。唐名洛陽。西京葛野郡。又謂右京。唐名長安。南北一

千七百五十三丈。除大路小路。東西一千百八十丈。除大路小路通計東西兩京。

〔元亨釋書〕 卷第二十三 資治表四 桓武皇帝

十有二年。春正月。沙門賢璟及官吏。相平安城都地。夏。秋。冬。

延曆十二年。正月。詔御史大夫藤原小黒。尚書左丞紀古佐美及賢璟。視新城之地。璟師此行。我門不層。曷爲書。

褒。曷爲褒。褒<sub>二</sub>璟師公才<sub>一</sub>也。公才我門何有。公才我門一化也。

【参考】

〔日本後紀〕 卷第八 桓武天皇 延暦十八年二月乙未條

(二十一日)

乙未。(中略)贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨。(中略)清麻呂練<sub>二</sub>於庶務<sub>一</sub>。尤明<sub>二</sub>古事<sub>一</sub>。撰<sub>二</sub>

民部省例廿卷<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>今傳焉。奉<sub>二</sub>中宮教<sub>一</sub>。撰<sub>二</sub>和氏譜<sub>一</sub>奏之。帝甚善之。長岡新都。經<sub>二</sub>十載<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>功。費不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>勝計<sub>一</sub>。

清麻呂潛奏。令<sub>下</sub>上託<sub>二</sub>遊獵<sub>一</sub>。相<sub>中</sub>葛野地<sub>上</sub>。更遷<sub>二</sub>上都<sub>一</sub>。

和氣清麻呂潛かに奏し、  
相地

十六日(乙未)五位已上を宴し、祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十二 歲時三 十六日踏歌

十二年正月乙未。宴<sub>二</sub>五位已上<sub>一</sub>。賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。

十七日(丙申)恠により射を停む。

〔類聚國史〕 卷第七十二 歲時三 十七日射禮

十二年正月丙申。停<sub>レ</sub>射。以<sub>二</sub>射場有<sub>レ</sub>恠也<sub>一</sub>。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙申。停<sub>レ</sub>射。以<sub>二</sub>射場有<sub>レ</sub>恠也<sub>一</sub>。

二十一日(庚子)宮を壞さむとするにより、東院に遷御したまふ。

〔類聚國史〕 卷第二十八 帝王八 天皇遷御

十二年正月庚子。遷<sub>レ</sub>御東院。縁<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>壞<sub>レ</sub>宮也。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚子。遷<sub>レ</sub>御於東院。縁<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>壞<sub>レ</sub>宮也。

【参考】

〔長岡京跡出土木簡〕 東院西外郭跡（木簡研究二三・長岡京跡左京北一條三坊二町）

・東院内候所収帳

・延曆十三年正月一日（題籤軸）

(104) × 30. 5 × 8.5 061

〔長岡京跡出土墨書土器〕 東院西外郭跡（長岡京跡左京北一條三坊二町）

東院（須惠器杯底部外面）

二十五日（甲辰）大伴親王奉獻す。曲宴ありて、藤原繩主らに位を授け、事に供ふる五位已上に祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十一 天皇遊宴

甲辰。諱<sub>淳和太</sub>上天皇奉獻。曲宴。從五位上藤原朝臣繩主授<sub>三</sub>正五位下。正六位上板茂連濱主外從五位下。其供<sub>レ</sub>事五位已上。賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

十二年正月甲辰。諱<sub>淳和太</sub>上天皇奉獻。曲宴。從五位上藤原朝臣繩主授<sub>三</sub>正五位下。正六位上板茂連濱主外從五位下。其供<sub>レ</sub>事五位已上。賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。



二十六日(乙巳)任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

乙巳。任官。

〔公卿補任〕 延暦十二年條

〔參議 從三位〕 壹志濃王<sup>六十</sup> 正月乙巳兼越前守。六月敍從三位。

二十七日(丙午)藤原小黒麻呂奉獻す。五位已上に祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

丙午。大納言正三位藤原朝臣小黒麻呂奉獻。賜五位已上祿<sup>三</sup>有<sup>レ</sup>差。

是 月 雜載

〔公卿補任〕 延暦十二年條

〔參議 從三位〕 紀古左美 左大辨。春宮大夫。右衛門督。但馬守。正月從三位。

〔長岡京跡出土木簡〕 東院西外郭跡(木簡研究)三三・長岡京跡左京北一條三坊二町

・ □…延暦十二年正月十六日 □

□<sup>〔解申之〕</sup>

(55 + 175) × 41 × 4 019

二月 小盡  
庚戌朔

二日（辛亥）參議壹志濃王らを遣して、遷都を賀茂大神に告げしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

二月辛亥。遣<sub>下</sub>參議治部卿壹志濃王等<sub>一</sub>。告<sub>中</sub>遷都於賀茂大神<sub>上</sub>。

【参考】

〔延喜式〕 卷第九 神名上 山城國

愛宕郡廿一座<sub>大八座</sub>  
小<sub>十二座</sub>

賀茂別雷神社<sub>亦若雷。名神大。</sub>  
月次相嘗新嘗

（中略）

賀茂御祖神社二座<sub>並名神大。月次相嘗新嘗</sub>

○參議紀船守らを遣して奉幣し、長岡への遷都を賀茂大神に告げしむこと、延暦三年六月十三日〔續紀史料〕十九―256 條參照。

三日（壬子）高津内親王奉獻す。曲宴ありて、親王の外親に位を授け、五位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

二月壬子。高津内親王奉獻。曲宴。外從五位下雲飛宿禰淨永。正六位上坂上大宿禰廣人並授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>親王外親<sub>一</sub>也。五位已上賜<sub>レ</sub>衣。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

二月壬子云々。高津内親王奉獻。曲宴。外從五位下雲飛宿禰淨永。正六位上坂上大宿禰廣人授<sub>二</sub>從五位下<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>親王外親<sub>一</sub>也。

四日(癸丑) 栗前野に遊獵したまふ。伊豫親王の莊に御し、親王及び山背國司奉獻す。五位已上に衣被を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十二年二月癸丑。遊獵于栗前野。便御伊豫親王莊。親王及山背國司奉獻。五位以上賜衣被。

○桓武天皇が栗前野遊獵の後に伊豫親王の江亭に御すこと本年九月二十二日、伊豫親王の愛宕庄に幸すること延暦二十三年八月十九日、北野遊獵の後に伊豫親王の大井莊を過ること同月二十七日條參照。

九日(戊午) 勅して、四天王寺に施入せし故藤原永手の位田は、收還すること莫らしめたまふ。

〔類聚國史〕 卷第百八十二 佛道九 寺田地

十二年二月戊午。播磨國言。故左大臣從一位藤原朝臣永手位田<sup>□</sup>町。神護景雲三年有勅入四天王寺。夫賜位田者。以身爲限。永入寺家。事乖國憲。勅。先朝既行。宜莫收還。

○播磨國飾磨郡の四天王寺墾田の代わりの田を施入せしこと神護景雲元年十一月六日(『續紀史料』十四-420)、播磨國の位田・口分田を収めて四天王寺に施入せしこと神護景雲三年六月是月(『續紀史料』十五-207)、四天王寺に施入せし田を収め、位田・口分田に班給せしこと寶龜四年二月十一日(『續紀史料』十六-611) 參照。

十日(己未) 隼人を率て入朝するを以て、大隅國曾於郡の大領曾乃君牛養に位を授く。

〔類聚國史〕 卷第百九十 風俗 隼人

十二年二月己未。大隅國曾於郡大領外正六位上曾乃君牛養授外從五位下。以下率隼人入朝也。

大學寮の言により、禮法により供牲の全躰を祭庭に進ることを許す。

〔日本紀略〕 前篇十三

己未。大學寮言。云々。供牲全躰。令進祭庭。一依禮法。許之。

延曆十二年五月十一日格

式

延曆格

〔日本三代實錄〕 卷第四十八 光孝天皇 仁和元年十一月十日庚寅條

十日庚寅。勅定左右近衛。左右衛門。左右兵衛等府。所送釋奠祭牲。其一。應送進鮮牲事。檢太政官去延曆十二年五月十一日格云。祭禮之事。潔淨爲本。又割牲體。明在禮法。然而頃年諸國進牲。既以割穢供祀。釋奠多乖禮制。須並用全軀。令進祭庭。一依禮法。割鮮升供。式云。三牲各加五藏。六衛府別。各一頭供之。今案延曆格。所以令全軀供者。以取其新合其禮法也。而式文曰。各加五藏。即是軀解可知。雖全軀解。前後各異。而至于潔清新鮮。是古今不易之法也。而今諸衛牲。腐臭尤甚。弃而不可用。匪常祀忍而供之。恐乖禮制。祭祀之正道。鮮潔爲先。宜嚴下新制。令合禮法。其二。應定牲代魚色事。式云。享日在諸祭之前。及与祭相當。停用三牲及兔。代以魚。而今諸衛所進牲代物。或乾魚或果子。所送非一。猥任人意。宜令六府送鮒鯉鮮潔者也。其三。應停六府送兔。輪轉令送乾兔二頭事。式云。三牲及兔。六衛府各一頭供之。又云。豆實兔醢五合。今檢。先聖先師。獨供兔醢。其餘不供之。加以造醢之法。先乾其肉。百日即成。謂之干豆者。是取其義也。而今諸衛府。前祭一日之夕。送鮮兔。夜中造醢。豈合禮意。自今以後。潔淨乾曝。先祭三月。送大膳職。依禮令造。其送致之次。左近爲一番。餘府依次輪轉。終而更始。如此則豆實合禮。衛府省煩。先是。大學寮申請請改行此事。至是許之。

【參考】

〔令義解〕 卷第三 學令 釋奠條

凡大學國學。每年春秋二仲之月上丁。釋奠於先聖孔宣父。其饌酒明衣所須。並用官物。

〔延喜式〕 卷第二十 大學寮

三牲 大鹿。小鹿。菟醢。  
豕各加五臟。菟醢。

右。六衛府別大鹿。小鹿。豕各一頭。先祭一日進之。以充牲。其菟一頭。先祭三月致大膳職。乾曝造醢。祭

三牲

日辨貢。其貢進之次。以左近爲一番。諸衛輪轉。終而更始。

凡諸衛所進之牲。若致腐臭。早從返却。令換進之。

凡享日。在園韓神并春日大原野等祭之前。及与祭日相當。停用三牲及菟。代之以魚。其魚每府令進五寸以上鯉鮒之類五十隻鮮潔者。凡魚醢者。大膳職造備。臨祭辨貢之。

十三日 (壬戌) 水生野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

壬戌。遊獵於水生野。

十五日 (甲子) 和泉國以下十國の國司の公廨を定む。

〔類聚三代格〕 卷第六 公廨事 (前田家本、前田育徳會尊經閣文庫藏)

(龜頭朱書)

〔貞式〕

太政官符

定新置介掾公廨田事力分法事

甲斐 能登 丹後 石見 周防 長門 土左 日向

右八箇國所介。公廨四分。公廨田一丁六段。事力五人。

飛驒

右一國掾。公廨三分。公廨田一丁三段。事力四人。

以前。得能登國解稱。被太政官去年六月二日符稱。依太政官去三月九日奏。新置介員。延曆十二年二月十五日格云。和泉。伊豆。甲斐。安房。能登。石見。周防。淡路。阿波。土左等國司公廨。守五分。掾三分。又案令云。公廨田。大國守二丁六段。上國守大國介二丁二段。中國守上國介二丁。下國守大上國掾一丁六段。中國掾大上國目一

延曆十二年二月十五日格  
令

丁二段。中下國目一丁二段。中下國目一丁。軍防令云。給事力。大國守八人。上國守大國介七人。中國守上國介六人。下國守大上國掾五人。中國掾大上國目四人。中下國目三人者。案件格令。未見中國介之分法。謹請官裁者。官判新置介掾諸國。宜同依件行之。

貞觀八年三月七日

十七日(丙寅) 征東使を改め征夷使と爲す。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙寅。改征東使爲征夷使。

○伊治岩麻呂反きて、藤原繼繩を征東大使に任ずること寶龜十一年三月二十六日〔續紀史料〕十八―309、大伴弟麻呂を征夷大使に任ずること延暦十年七月十三日〔續紀史料〕二十一―618、征東大使大伴弟麻呂が辭見せしこと延暦十一年閏十一月二十八日條參照。

二十日(己巳) 任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

己巳。任官。(後略)

○和家麻呂が兼治部大輔に任じられしこと、是月雜載掲出の『公卿補任』參照。

僧綱を任ず。

〔日本紀略〕 前篇十三

己巳。(中略) 任僧綱。

〔七大寺年表〕

延暦十二年癸酉

(中略)

律師善上

等 定<sub>二</sub>二月廿日。任<sub>三</sub>少僧都。

(中略)

施 曉<sub>二</sub>二月廿日任。行基弟子。光信大徳弟子。法相宗。

(後略)

二十一日(庚午) 征夷副使近衛少將坂上田村麻呂辭見す。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚午。征夷副使近衛少將坂上田村磨辭見。

○坂上田村麻呂が征東副使に任ぜられしこと延暦十年七月十三日條〔續紀史料〕二十一(618) 參照。

二十六日(乙亥) 皇太子安殿親王奉獻す。諸王及び藤原の諸親ら雜樂を奏し、物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 奉獻 獻物

乙亥。皇太子奉獻。諸王及藤原諸親等奏<sub>二</sub>雜樂。賜<sub>レ</sub>物有<sub>レ</sub>差。

二十七日(丙子) 氣比神宮の封の租穀は神庫に勘納し、祭料に充用せしむ。

〔類聚二代格〕 卷第一 神封物并租地子事(水谷川家本、天理大學附屬天理圖書館藏)

(龜頭朱書)

〔延一神〕

太政官符

延曆十二年二月二十七日  
符

應<sub>下</sub>收<sub>二</sub>納神庫<sub>一</sub>充<sub>中</sub>用祭料<sub>上</sub>氣比神宮封租穀事

右。得<sub>二</sub>神祇官解<sub>一</sub>備。彼神宮司大中臣安根解備。檢案内。太政官去延曆十二年二月廿七日下午<sub>二</sub>越前國符備<sub>一</sub>。官司大中臣魚取解備。封租穀須<sub>下</sub>勘<sub>二</sub>納神庫<sub>一</sub>充<sub>中</sub>用祭料<sub>上</sub>。而國更徵<sub>二</sub>納官庫<sub>一</sub>。充<sub>二</sub>用他色<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>彼祭時<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>肯<sub>二</sub>下行<sub>一</sub>。度々祭事。由<sub>レ</sub>其闕怠。望請。勘<sub>二</sub>納神庫<sub>一</sub>。充<sub>二</sub>用祭料<sub>一</sub>。謹請<sub>二</sub>官裁<sub>一</sub>者。右大臣宣。依<sub>レ</sub>請者。國依<sub>二</sub>符旨<sub>一</sub>。行來既尚矣。而去弘仁元年。介橋朝臣永繼与<sub>二</sub>官司<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>相論<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>件租穀<sub>一</sub>。更納<sub>二</sub>官庫<sub>一</sub>。而官司無<sub>レ</sub>意<sub>二</sub>相争<sub>一</sub>。專任<sub>二</sub>國行<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>今以後。積習爲<sub>レ</sub>例。充<sub>二</sub>用遠郡<sub>一</sub>。運漕之間。殆過<sub>二</sub>祭期<sub>一</sub>。神事疎略。大概在<sub>レ</sub>茲。貢神之物。豈可<sub>レ</sub>如此。望請。徵<sub>二</sub>納神庫<sub>一</sub>。以省<sub>二</sub>申請之煩<sub>一</sub>者。官檢<sub>二</sub>案内<sub>一</sub>。件租穀專盡<sub>二</sub>神用<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>充<sub>二</sub>他色<sub>一</sub>。然則納<sub>二</sub>於官庫<sub>一</sub>。還無<sub>二</sub>公益<sub>一</sub>。納<sub>二</sub>於神庫<sub>一</sub>。尤有<sub>二</sub>便宜<sub>一</sub>。望請。重仰<sub>二</sub>國宰<sub>一</sub>。據<sub>二</sub>准舊例<sub>一</sub>。徵<sub>二</sub>納神庫<sub>一</sub>。以充<sub>二</sub>祭料<sub>一</sub>。謹請<sub>二</sub>官裁<sub>一</sub>者。右大臣宣。依<sub>レ</sub>請。但至<sub>二</sub>于出<sub>一</sub>納件物。官司司相共行<sub>レ</sub>之。

元慶八年九月八日

二十八日(丁丑)藤原繼繩奉獻す。宴飲奏樂あり。

〔類聚國史〕卷第七十八 奉獻 獻物

丁丑。右大臣從二位藤原朝臣繼繩奉獻。宴飲奏樂。

是月 雜載

〔東大寺文書〕播磨國符案(平安遺文07・兵庫原史)

國符赤穂郡内<sub>(可力)</sub>

禁斷山壹處<sub>(部力)</sub>  
山者、主東大寺

四至限。依<sub>二</sub>先官符旨<sub>一</sub>。

右、得<sub>二</sub>彼僧慈親狀<sub>一</sub>備。件山不<sub>レ</sub>遵<sub>二</sub>禁制<sub>一</sub>。氏恣<sub>(良)</sub>伐損。仍請<sub>二</sub>處分<sub>一</sub>者。國判。件山以<sub>二</sub>去天平勝寶八年<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>勅特所<sub>二</sub>獻入<sub>一</sub>也。郡宜承知。嚴加<sub>二</sub>禁斷<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>伐損<sub>一</sub>。符到奉<sub>(行)</sub>。



介笠朝臣江人

大掾多治比真人清見

少掾大伴宿禰國守

少目爪工造三仲

延曆十二年二月廿九日

〔公卿補任〕 延曆十五年條

(參議) 從四位下 和家曆<sub>三</sub>六<sub>十</sub> 三月一日壬辰任。七月廿八日正四下

(中略)

延曆五年正月七日從五下 (中略) 十二年正月丙戌正五位上。二月兼治部大輔。四月庚戌從四下。五月兼大和守 (大輔如元) (後略)

三月 大盡  
己卯朔

一日（己卯）葛野に幸し、新京を巡覽したまふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

三月己卯朔。幸<sub>二</sub>葛野<sub>一</sub>。巡<sub>三</sub>覽新京<sub>一</sub>。

○遷都のため地を相さしむこと本年正月十五日、遷都を賀茂大神に告げしむこと本年二月二日條參照。

三日（辛巳）南園に禊し、文人をして詩を賦せしむ。五位已上及び文人に祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十三 歲時四 三月三日

十二年三月辛巳。禊<sub>二</sub>于南園<sub>一</sub>。令<sub>下</sub>文人<sub>一</sub>賦<sub>也</sub>詩。五位已上及文人賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。

七日（乙酉）新京宮城内の百姓の地に三年の價直を給ふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

乙酉。新京宮城之内。百姓地卅四町給<sub>二</sub>三年價直<sub>一</sub>。

○長岡の新京宮内に入る百姓私宅の主に當國の正税を賜ふこと、延曆三年六月二十八日〔續紀史料〕十九―260〕條參照。

九日（丁亥）攝津職を改めて國と爲す。

〔日本紀略〕 前篇十三

丁亥。改<sub>二</sub>攝津職<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>國。

〔類聚三代格〕 卷第五 分置諸國事 (金澤文庫舊藏本、宮内廳書陵部藏)

(龍頭朱書)

「弘式」

太政官符

應<sub>下</sub>停<sub>二</sub>攝津職<sub>一</sub>爲<sub>中</sub>國司<sub>上</sub>事

右。被<sub>二</sub>右大臣宣<sub>一</sub>稱。奉<sub>レ</sub>勅。難波大宮既停。宜<sub>下</sub>改<sub>二</sub>職名<sub>一</sub>爲<sub>中</sub>國。其<sub>二</sub>季祿及月料。並從<sub>二</sub>停止。

延曆十二年三月九日

難波大宮

〔令集解〕 卷第六 職員令

攝津職 帶<sub>二</sub>津國<sub>一</sub>。延曆十二年三月九日官符云。應<sub>下</sub>停<sub>二</sub>攝津職爲國司<sub>上</sub>事。右。被<sub>二</sub>右大臣宣<sub>一</sub>稱。奉<sub>レ</sub>勅。難波大宮既停。宜<sub>下</sub>改<sub>二</sub>職名爲國。其<sub>二</sub>季祿及月料。並宜<sub>二</sub>停止。

延曆十二年三月九日官符

〔弘仁格抄〕 上 格卷二 式部上 (九條家本、宮内廳書陵部藏)

應<sub>下</sub>停<sub>二</sub>攝津職<sub>一</sub>爲<sub>中</sub>國司<sub>上</sub>事 延曆十年三月九日

〔和名類聚抄〕 卷第二 國郡部第十二 (元和古活字本)

攝津國<sub>延曆十三年</sub>停<sub>レ</sub>職爲<sub>中</sub>國。管十二。

〔法隆寺東院縁起〕 (大日本仏教全書)

以後天平十九年二月 [ ] 攝津職攝津國延曆十三年停<sub>レ</sub>職爲<sub>中</sub>國<sub>倭名類聚</sub>。住吉郡墾田地貳拾伍町。播磨國賀古郡墾田地壹佰町施納賜也。

十日（戊子）壹志濃王らを遣して、遷都の由を告ぐるを以て、伊勢大神宮に奉幣す。

〔日本紀略〕 前篇十三

戊子。遣<sub>下</sub>參議壹志濃王等<sub>二</sub>奉幣於伊勢大神宮<sub>上</sub>。告以<sub>二</sub>遷都之由<sub>一</sub>。

十一日（己丑）修理東大寺塔寺料より封一百戸を割き、修理新薬師寺の封に宛つ。

〔東大寺要録〕 卷第六 封戸水田章第八（東大寺本、東大寺圖書館藏）

僧綱牒 東大新薬二寺鎮

応<sub>下</sub>割<sub>二</sub>修理東大寺塔寺料封一百戸<sub>一</sub>宛<sub>中</sub>修理新薬師寺封<sub>上</sub>事

牒。玄蕃寮今月九日牒云。省今日符備。被<sub>二</sub>太政官去二月二十七日符<sub>一</sub>備。得<sub>二</sub>新薬師寺鎮三綱等牒<sub>一</sub>備。去天平宝字六年潤十二月十七日有<sub>二</sub>恩勅使<sub>一</sub>。割<sub>二</sub>於東大寺料封一百戸<sub>一</sub>。施<sub>二</sub>入此寺<sub>一</sub>。永供<sub>下</sub>養修<sub>二</sub>造靈塔仏殿僧坊等類<sub>上</sub>。而造作未<sub>レ</sub>畢之間。件封被<sub>レ</sub>収畢。已<sub>レ</sub>収之封。重施<sub>二</sub>新薬<sub>一</sub>。然即。朽損殿塔。還免<sub>二</sub>於漏湿<sub>一</sub>。毀碎材瓦。後園<sub>二</sub>於當年一者<sub>一</sub>。仍檢<sub>二</sub>案内<sub>一</sub>。太政官宝龜十一年十二月十日下午<sub>二</sub>造東大寺司符<sub>一</sub>。被<sub>二</sub>内大臣宣備<sub>一</sub>。奉<sub>レ</sub>勅。去天平宝字四年七月二十三日勅内備。平城宮御宇後太上天皇。々太后。以<sub>二</sub>去天平勝宝二年二月二十三日<sub>一</sub>。入<sub>二</sub>東大寺封五千戸<sub>一</sub>。造寺畢後。種々用未<sub>レ</sub>宣<sub>二</sub>分明<sub>一</sub>。今追議定。以<sub>二</sub>一千戸<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>營造修理塔寺分<sub>一</sub>。二千戸供養<sub>二</sub>三宝并常住分<sub>一</sub>。二千戸官家修行諸仏事分者。今被<sub>二</sub>大臣宣備<sub>一</sub>。奉<sub>レ</sub>勅。宜<sub>下</sub>割<sub>二</sub>取營造修理塔寺分封一千戸内一百戸<sub>一</sub>。宛<sub>中</sub>修理新薬師寺分<sub>上</sub>。其物実者。爲<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>本倉<sub>一</sub>。臨時下宛。修造之日。令<sub>二</sub>東大寺三綱共知<sub>一</sub>其用度<sub>二</sub>者<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>承知。依<sub>レ</sub>宣施行者。寮宜<sub>二</sub>承知<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>宣施行者。今以<sub>レ</sub>狀牒者。二寺三綱。宜<sub>レ</sub>承知。牒到準<sub>レ</sub>狀。故牒。

延曆十二年三月十一日 從儀師

十二日（庚寅）新京の宮城を築かむがため、五位已上及び諸司主典已上に役夫を進らしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚寅。令<sub>下</sub>五位已上及諸司主典已上<sub>二</sub>進<sub>二</sub>役夫<sub>一</sub>。築<sub>中</sub>新京宮城<sub>上</sub>。

二十五日(癸卯)遷都の由を山陵に告ぐ。

〔日本紀略〕 前篇十三

癸卯。告<sup>二</sup>遷都由於山陵<sup>一</sup>。山階。後田原。先田原。

【参考】

〔延喜式〕 卷第二十一 諸陵寮

(前略)

山科陵

近江大津宮御宇天智天皇。在山城國宇治郡。兆域東西十四町。南北十四町。陵戸六烟。

右一。近陵。

(中略)

田原西陵

春日宮御宇天皇。在大和國添上郡。兆域東西九町。南北九町。守戸五烟。

(中略)

右十三。遠陵。

田原東陵

平城御宇天宗高紹天皇。在大和國添上郡。兆域東西八町。南北九町。守戸五烟。

右一。近陵。

(後略)

不明(己酉)監主官物を取るにより多治比彌高、匿名の書を投ずるにより櫻嶋部石守を除名す。

〔類聚國史〕 卷第八十七 刑法一 斷罪

十二年三月己酉。正親大令史正六位上多治比真人彌高。散位從六位上櫻嶋部石守並除名。以下彌高監主取<sup>二</sup>官物<sup>一</sup>。石守投<sup>中</sup>匿名書<sup>上</sup>也。

○延曆十二年三月、己酉ノ千支ナシ。乙酉(七日)モシクハ四月朔己酉(一日)ナラム。

四月 小盡  
己酉朔

一日（己酉）曲宴ありて、五位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十五 歳時六 曲宴

桓武天皇延暦十二年四月己酉朔。曲宴。賜五位已上衣。

三日（辛亥）葛野に幸し、便に右大臣の別業に幸す。

〔日本紀略〕 前篇十三

四月辛亥。幸葛野。便幸右大臣別業。

七日（乙卯）五位已上を宴し、祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

四月乙卯。宴五位已上。賜祿有差。

十日（戊午）曲宴ありて、參議以上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

戊午。曲宴。賜參議以上衣。

二十三日（辛未）國司公廨を以て焼亡せる官物を填むことを停め、法により推決せしむ。

〔類聚三代格〕 卷第八下 填納事（前田家本、前田育徳會尊經閣文庫藏）

太政官符

應填納焼亡官物事

延暦十二年四月二十三日  
符

神火  
延暦五年八月七日格

右檢案内。太政官去延暦十二年四月廿三日下（藤原維徳）五畿内七道諸國符。被（藤原維徳）右大臣宣。奉勅。檢去延暦五年六月一日。亦同年八月七日兩度官符。如有燒亡官物。以國司公廨填之者。事乖弘恕。宜並停止。但自今以後。有如此類。必據法推決。以懲將來。俾夫監臨之官。勤肅所部。守掌之人。慎其防衛者。今右大臣宣。奉勅。頃者諸國司等。不勤肅清。屢致失火。爲避其責。恒僭神火。官物之損。不可勝計。救弊之道。事資改張。自今以後。宜依延暦五年八月七日格。不問神火人火。令當時國司郡司及稅長等。一物已上。依數填備。其被差雜使。出國境外。不遭火灾者。不在填限。但國司者。以任中公廨填之。若當遷替年。有失火者。只奪其年料填之。

弘仁三年八月十六日 或本十三年六月十六日云々

【參考】

〔日本後紀〕 卷第二十二 嵯峨天皇 弘仁三年八月辛丑條

承前格  
前格  
辛丑。檢承前格。有燒亡官物。以國司公廨填。事乖弘恕。自今以後。必據法推決。以懲將來。俾夫監臨之官。勤肅所部。守掌之人。慎其防衛者。然頃者國司等。不勤肅清。屢致失火。爲避其責。恒僭神火。官物之損。不可勝計。救弊之道。事資改張。自今以後。宜依前格。不問神灾人火。令當時國司郡司及稅長等。依數填備。其被差使。出境之官。不在此限。但國司者。以任中公廨填之。若當遷替年。有失火者。只奪其年料填之。

○勅して國司の公廨を奪ひにより焼失せる官物を填めしむること延暦五年六月一日（『續紀史料』二十一37）條參照。

二十八日（丙子）制を下して、年分度者は漢音を習はざれば得度すること勿らしむ。

〔類聚國史〕 卷第百八十七 佛道十四 度者

十二年四月丙子。制。自今以後、年分度者。非習漢音。勿令得度。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙子。制。自今以後、年分度者。非<sub>レ</sub>習<sub>二</sub>漢音<sub>一</sub>。勿<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>得度<sub>一</sub>。

○勅して明經の徒に漢音を熟習せしめたまふこと延暦十一年閏十一月二十日、讀書出身の者は漢音を習はしめしこと延暦十七年二月十四日（弘仁格抄）、年分度者には正音を習ふ者を擇ぶべきこと延暦十七年四月十五日（日本後紀逸文）條參照。

是月 雜載

〔石崎直矢氏舊藏文書・東大寺文書〕 播磨國坂越神戸兩郷解（平安遺文09・兵庫県史）

（石崎直矢氏舊藏文書）

赤穂郡坂越郷神戸兩<sub>レ</sub>郷解 申<sub>レ</sub>所勘問東大寺鹽山事

部下大聖生内山<sub>レ</sub>東大寺

右。件山者。自<sub>二</sub>天平勝寶五歲迄<sub>二</sub>七歲<sub>一</sub>。所謂故寺<sub>（守セ）</sub>大伴宿禰之點山并葦原壘田<sub>（守セ）</sub>所云。瀬當郡人秦大炬之目代也。所作鹽堤。而不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>彼堤堅<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>治事<sub>一</sub>。大炬等退却。而自<sub>二</sub>勝寶八歲<sub>一</sub>與少聖生大聖生。自中尾立<sub>二</sub>堺柱<sub>一</sub>。寺家山數冊餘町許大聖生山云。仍宛<sub>二</sub>山<sub>（守セ）</sub>使<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>守林<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>序年<sub>一</sub>。然自<sub>二</sub>八歲<sub>一</sub>以來。不<sub>（預カ）</sub>瀬<sub>（天）</sub>禰<sub>（守）</sub>家使。而以<sub>二</sub>去延曆七歲七月一日<sub>一</sub>。專前少掾大伴宿禰山到來。更改<sub>二</sub>大串尾<sub>一</sub>立<sub>二</sub>堺柱<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>茲寺家之所林木悉伐損少掾家等。而今寺使僧等來。當土人夫等。追<sub>二</sub>召山堺<sub>一</sub>勘問。仍細子先後。行事證申。件山者。<sub>（預カ）</sub>當郷比郡比國之人夫等知<sub>二</sub>寺山<sub>一</sub>。隨<sub>二</sub>山使等口狀<sub>一</sub>。樣給鹽燒奉<sub>二</sub>地子<sub>一</sub>事実申。仍注<sub>二</sub>具狀<sub>一</sub>。以解。

延曆十二年四月十七日

坂越郷刀禰外從八位下川内入鹿

若湯坐倉足

川内夫凡君

神戸里神人廣永

他田祖足



神人□代

(東大寺文書)

神人乙□(公カ)

六人ア□(福カ)人

里長他田眞□

坂越郷収納長□□□

津長若鳥里足

勘郡司

擬大領外八位上秦造從

擬少領无位秦造雄鱈

國依<sub>ニ</sub>解決<sub>一</sub>。判許如<sub>レ</sub>件。

延曆十二年五月十四日

從五位上行介阿保朝臣人上

擬主帳外正八位上播磨直

從六位上行少目爪工造三仲

正六位上行大掾紀朝臣長田万(記カ)

【参考】

〔東大寺文書〕 第七卷第七號 東大寺諸莊文書并繪圖目錄 (東大寺六 105、128、平安遺文 2156)

東大寺諸國庄々文書并繪圖等目錄事

(中略)

一 播麻國(マ)

(中略)

赤穂郡□十町九段百七十二步 並點地(五カ)

延曆十二年四月十七日解  
状  
同年五月十四日解状  
同年正月廿九日國符

四至 東赤穗川 南海 西大依松原 北百姓口分并塩生山崎

一通 延曆十二年四月十七日 在地解状

同年五月十四日 依在地解状。加<sub>三</sub>國判文<sub>二</sub>。

同年正月廿九日 山伐損禁斷國符

一通 貞元<sub>(皇)</sub>五年十月廿六日 郡司注文

合百十町九段百七十二步

-----  
塩濱五十町九段百七十二步 在細々四至

山六十町。四至 東太夫手前并腰佩谷 西少里谷  
南桃尾太守并公田 北太岑隈

雜々文一結。在文書十五通。雜文六七枚許。紙絵圖一楨。

(中略)

右。見在文書并繪圖等。目錄如<sub>レ</sub>件。

但除<sub>二</sub>自<sub>レ</sub>京下遣文書定<sub>一</sub>。

大治五年三月十三日專當大法師(花押)「範賢」(裏書)

(以下、署名略)

〔東大寺文書〕 播磨國東大寺領莊々文書目錄(東大寺文書四ノ八十六、平安遺文2788)

〔播磨國寺領 公驗 仁平三年〕  
(編裏)

使下部戒勢法師

注進 播磨國寺領庄々公驗事

合

一垂水庄

十枚 淳和院勘状<sub>無年号</sub>

一枚 承和十二年塩山治田寺牒國司

一枚 同十一年淳和院牒國司

四枚 寶字八年僧賢惠永地雜物施入帳

三枚 同年施入庄民請文二枚加備前備中備後壱田勝寶八年施入官符

一赤穂庄公驗

二枚 貞觀十七年塩濱預僧庄解

二枚 同年預僧□解

一枚 同五年塩濱治田山四至郡解

延曆十二年塩山郡解

寺牒・國符

二枚 延曆十二年塩山郡解在仁平元年國符四至注文

二枚 同年四至内損伐禁斷寺牒國符請文

此外。承和以後文書四通。加繪圖。

一益氣庄

二枚 寺使申文年号

二枚 延曆二年買納壱田郡解

右。注進如件。仁平三年七月二日 上座圓尊上

〔公卿補任〕 延曆十五年條

(參議) 從四位下 和家曆三六 三月一日壬辰任。七月廿八日正四下

(中略)

延曆五年正月七日從五下 (中略) 十二年正月丙戌正五位上。二月兼治部大輔。四月庚戌從四下。五月兼大和守 (大輔如元) (後略)

〔東大寺文書〕 東大寺領播磨國莊園文書目錄（高橋義彦氏所藏、平安遺文2899）

〔東大寺播磨國庄園文書目錄〕

〔加東大寺封戸庄園連券内播磨所領注文一枚〕案文

一帖 明石郡塩山邑 弘塩布注之

已上不入目六如何。

保元三年七月卅日到来

東大寺

注進播磨國寺領庄園文書目錄事

赤穂庄 垂水庄 栗生庄 益氣庄

〔正〕 一卷一枚 承和五年庄々惣券

〔正〕 一帖四十五枚 同年庄庄公驗

〔正〕 一卷二枚 永延二年庄々目錄返抄

大塩部濱庄三詔供 東南院

〔正〕 一卷四枚 延曆十二年寺牒國符郡判解状

〔正〕 一通一枚 承曆四年四至國判

〔正〕 一卷三枚 庄解裁判承保二年

右。大略注進。如件。

〔已上請取了（花押）〕

保元二年八月 日 都維那法師〔永俊〕

寺主大法師〔淨巖〕

上座大法師〔圓尊〕

〔件案文  
未到〕大部庄文書一卷

一通 久安三年宣旨案。可<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>替本領三箇庄<sub>一</sub>之由。

一通 同年宣旨案。可<sub>下</sub>遣<sub>二</sub>官使立<sub>一</sub>中券寺領上之由。

二通 同年國司廳宣案兩度共奉行狀

已上四通。正文并官使立券本文書等。寛信法務之時。爲<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>被<sub>二</sub>召取<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>寺家<sub>一</sub>。子細見<sub>二</sub>案文等<sub>一</sub>。

〔東大寺文書〕 公文所公文藤原家職東大寺領文書請取狀 (東大寺文書四ノ八十五、平安遺文 3829)

〔端裏〕播磨<sub>丈部庄</sub> 伊勢飯野庄 讃岐原保等請文永俊寺主  
持下之

公文所

請預 東大寺御領播磨國<sub>丈部庄</sub>伊勢國飯野庄讃岐國原保文書等事

一 播磨國<sub>丈部庄</sub>

一卷 廿一枚 久安四年立券狀案文

一卷 廿枚 同年立券狀案文

二通 二枚 久安三年寺家國兩方宣旨案文

一通 一枚 久安元年序宣案文

二通 二枚 久安三年施行廳宣案文

一通 一枚 保元四年了義房讓狀

一通 一枚 永萬元年信舜讓狀

一通 一枚 保元三年兵衛尉平貞清請文案

一通 一枚 久安三年<sub>丈部庄</sub>可立券之由

一通 一枚 同年同可立券之由

一通一枚 久安三年以丈部郷立替三ヶ庄之由

一通一枚 同年同状

一通一枚 久安二年立券使可祇候由宣旨案文

一帖四十枚 承和十二年垂水庄。赤穂庄。益氣庄。田地坪々并施入帳等

一卷四通四枚 延曆十二年塩濱庄牒國符郡判解状等

一通三枚 保元々年宣旨廳宣案文

一通一枚半 寛平天曆寛徳年中庄園連券内播磨國所領

一通一枚 承和九年國司請文

一通二枚 保延三年石塩生庄東南院請文

繪圖一楨 承和十二年

(中略)

右。所請預<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>件。

治承二年四月 日公文前内舍人藤原朝臣家職

五月 大盡  
戊寅朔

一日 (戊寅) 曲宴ありて、五位已上に物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十五 歳時六 曲宴

桓武天皇延暦十二年五月戊寅朔。曲宴。賜五位已上物有差。

四日 (辛巳) 任官あり。

〔日本紀略〕 前篇十三

五月辛巳。任官。

〔公卿補任〕 延暦十三年・同十五年條

(延暦十三年)

(參議) 從四位下 藤乙叡<sup>三</sup> 十月廿七日程。兼左京大夫。

(中略)

寶龜九年二月内舍人。(中略) 延暦十二年五月辛巳左京大夫。十三年十月廿七日程三木。

(參議) 從四位下 紀梶長<sup>四</sup> 正月七日程。兼式部大輔。後改名勝長。右兵衛督。造東大寺長官。美作守

(中略)

性潤有雅量。好愛賓客。接待忘倦。饗宴之費。不問出入。步射容儀。應爲師模。但至犬馬翫好之物。不免嗜欲也。(中略) 十二年正月丙戌正五上。

五月辛巳兵部大輔。(後略)

十日 (丁亥) 典藥生に合藥を習はしむ。

〔弘仁格抄〕 上 格卷三 式部下 (九條家本、宮内廳書陵部藏)

應典藥生習合藥事

延暦十二年五月十日

【参考】

〔政事要略〕 卷第九十五 至要雜事 學校

醫疾令云。醫針生。初入學者。先讀本草。脈決。明堂。讀本草者。即令識藥形藥性。讀明堂者。即令驗圖。識其孔穴。讀脈決者。令通相診候。謂假有針生甲乙二人。令甲診。使知四時。浮沈澁滑之狀。謂澁者。難也。夏脈浮。冬脈沈。冷也。令乙診甲。是爲通相診候也。滑者。料也。夏脈浮。冬脈沈。冷也。脈澁。溫脈滑之類是也。次讀素問。黃帝針經。甲乙。脈經。皆使精熟。謂習讀經文。無所滯礙者。即學令。學生先讀經文通熟。然後講義。即其義也。其兼習之業。各令通利。

十一日（戊子）河内國交野郡の百濟寺に錢・稻を施入す。

〔類聚國史〕 卷第八十二 佛道九 施入物

十二年五月戊子。錢三十万及長門阿波兩國稻各一千束。特施入河内國交野郡百濟寺。

○交野に行幸し、詔して百濟寺に近江・播磨二國の正税各五千束を施すこと延暦二年十月十六日〔續紀史料〕十九（193）條參照。

十六日（癸巳）山背・攝津兩國をして放生せしむ。

〔類聚國史〕 卷第八十二 佛道九 放生

桓武天皇延暦十二年五月癸巳。遣山背攝津兩國放生。

〔政事要略〕 卷第二十三 年中行事八月下 石清水放生會

國史云。（中略）桓武天皇延暦十二年五月癸巳。遣山背攝津兩國放生。



是月 雜載

〔公卿補任〕 延曆十五年條

（參議） 從四位下 和家曆<sub>六十</sub>

三月一日壬辰任。七月廿八日正四下

（中略）

延曆五年正月七日從五下（中略）十二年正月丙戌正五位上。二月兼治部大輔。四月庚戌從四下。五月兼大和守（大輔如元）（後略）

六月 小盡  
戊申朔

一日（戊申）勅して、香藥を曝涼せむがため、宮内卿らを東大寺に遣はしめたまふ。  
〔東南院文書〕 第二櫃第七卷 ○延曆十二年六月一日太政官牒（東南院一―二三七）

○「太政官印」十二顆アリ

太政官牒 僧綱并東大寺三綱

從四位上守宮内卿兼行因幡守石上朝臣家成 從陸人

從五位下行官奴正大春日朝臣淨足

外從五位下行内藥侍醫兼佑廣海連男成 各從肆人

右。被<sub>二</sub>右大臣去五月廿九日宣<sub>二</sub>稱。奉<sub>レ</sub>

勅。爲<sub>下</sub>曝涼<sub>中</sub>在<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>香藥<sub>上</sub>。宜<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>件人等<sub>一</sub>

者。仍依<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>知<sub>二</sub>此状<sub>一</sub>。聽<sub>中</sub>

使處分<sub>上</sub>。其少僧都玄憐及三綱。與<sub>レ</sub>使

共加<sub>二</sub>檢校<sub>一</sub>。今以状牒。

延曆十二年六月一日左大史正六位上兼行土左掾淨野宿禰〔最弟〕

參議三位行左大辨兼春宮大夫衛門督但馬守勲四等紀朝臣「古佐美」

○東大寺の香藥などを曝涼せしこと、本月十一日條參照。

八日（乙卯）祈雨す。

〔日本紀略〕 前篇十三

六月乙卯。祈雨。

○炎早日を経ること、本月二十二日條參照。

玄憐・三綱  
檢校

十一日(戊午) 勅により東大寺の香藥などを曝涼す。

〔正倉院文書〕 北倉163 ○延暦十二年曝涼使解(大日古二十五―附34―54)

(新標外題)

〔曝涼目録〕

東大寺使解 申曝涼香藥等事

合壹佰肆拾五種 納厨子貳口韓櫝參拾合取納廳院西、  
雙藏北端

御書廿五卷

記書五卷

御袈裟九領

人勝二枚

念珠四具一水精  
紫琉璃 一紺琉璃

銅鉢四口

瑰箸二双

御禮服冠三箇

御凡冠一箇

御帛袷袍一領

襖子二領一絮綿  
一袷

汗衫一領

褶一條羅  
欄

袴一條絮  
綿

帶一條

袷子二條各二  
幅

帛綾袷袍一領

單衣一領

絮綿褶一腰  
欄

單幘子一條二  
幅

青両面褥一床

緑繩三副帳一條

白練綾大枕一枚

御軾二枚

紫檀木画夾纈軾一枚

御床二枚

御疊二枚錦  
端

金簿綵繪木鞘大刀子一口

金銅作唐刀子二口

金作小刀一口

金銀莊刀子六口

十合鞘刀子一口

三合鞘刀子三口  
犀角鞘刀子一口  
水角鞘刀子一口  
斑犀偃鼠皮帶一條

斑貝鞆帶一條  
赤紫黑紫緞綬帶一條

錦袋一口納麝香九兩二分  
袋一口盛呵梨勒卅六顆 雜玉四十九

笏三枚一牙一通天牙 一大魚骨  
尺六枚二紅牙撥鏤 二綠牙撥鏤 二白牙

木画紫檀碁局一具局裏藏碁子壺

碁子六百枚納銀平脫合子三合  
木画紫檀双六局一具

雙六頭一百十七具一隻  
雜玉雙六子一百六十九枚

紅牙撥鏤算子一百枚  
紫檀琵琶二面一螺 一鈿

紫檀五絃琵琶二面  
紫檀阮咸一面螺 鈿

桐木箏一面木画  
楸木瑟一面木画

新羅琴二面鍍金  
琴二面一銀平 一文 一漆

檜木倭琴二面  
銀平脫梳箱一合納琴箏琵琶等絃

甘竹簫一口虫喫  
吳竹笙一口

吳竹竽一口  
彫石橫笛一口

尺八四口一玉 一竹 一種樺 一刻彫  
彫石尺八一口析

白石鎮子十六箇師子兔牛等形  
青斑鎮石十廷

銀董爐一合  
貝玦拾二箇

柒胡磁一口銀平脫  
百索鏤一卷

御鏡廿面徑二尺一寸七分已下九寸二分已上  
杖刀二口

屏風二百四帖廿一雜画 四書 三鳥毛 一鳥形 六十五夾額 十臈額

(紙繼目)

繡線鞋八両

紫糸結鞋一両

合香二斤十二兩<sup>大</sup>納帛袋一口

緋糸刺納鞋一両

裏衣香五斤十五兩二分<sup>小</sup>并袋五口

犀角器一枚<sup>重十二兩二分</sup>  
破

犀角坏二口

犀角一具<sup>二隻連底重大四斤十四兩一分</sup>

白犀角一枚<sup>長三尺二寸七分重太六斤十兩二分</sup>

犀角一枚<sup>長二尺重太三斤六兩</sup>

斑犀一枚<sup>長七寸重太一斤十三兩二分</sup>

犀角三枚<sup>一重小二斤十三兩</sup>

一重小二斤一重小一斤十兩一分十五兩一分

淺香一村<sup>重太卅三斤五兩</sup>

麝香廿一劑<sup>重廿二兩二分</sup>  
并袋及裹

紫雪八斤十兩<sup>并壺</sup>

蕤椀二斤十四兩二分<sup>并袋</sup>

朴消七斤二兩二分<sup>并袋</sup>

小草二斤四兩

樺撥根三斤三兩<sup>并袋</sup>

胡椒一斤十二兩二分<sup>并袋</sup>

寒水石十二斤三兩<sup>并袋</sup>

阿摩勒九兩三分<sup>并袋</sup>

奄摩羅十五兩二分<sup>并袋</sup>

元青一管<sup>重五兩并管</sup>

青箱草一斤十五兩二分<sup>并袋</sup>

黑黃連二斤十三兩二分<sup>并袋</sup>

白皮九斤四兩二分<sup>并袋</sup>

理石三斤一兩二分

禹餘糧一斤十一兩二分<sup>并袋</sup>

大一禹餘糧二斤十二兩<sup>并袋</sup>

龍骨五斤九兩一分<sup>并袋</sup>

五色龍骨七斤八兩<sup>并袋</sup>

白龍骨四斤十四兩三分<sup>并袋</sup>

龍角九斤四兩二分<sup>并袋</sup>

五色龍齒廿四斤<sup>并袋</sup>

似龍骨石廿六斤四兩<sup>并袋</sup>

雷丸五斤十四兩二分<sup>并袋</sup>

鬼臼七兩<sup>并袋</sup>

青石脂六兩<sup>并袋</sup>

赤石脂七斤二兩<sup>并袋</sup>

(紙繼目)

紫鑽五十七斤十二兩并袋  
檳榔子二百九十八枚虫喫  
巴豆十七斤四兩并袋 虫喫  
厚朴十四斤八兩二分并袋  
呵梨勒四百四十枚  
芫花二百五十七斤五兩三分虫喫  
鍾乳床五斤一兩并袋  
宍縱容十斤五兩并袋 虫喫  
无食子八百九十枚  
遠志十九斤八兩并袋  
桂心一百八十八斤三兩二分

人參二百五斤八兩并袋 塵卅一斤

大黃五百五十九斤十一兩一分

塵十三斤二兩 臙蜜五百九斤七兩

甘草八十一斤五兩并袋 塵十一斤十兩并袋

芒消一百八十八斤十兩二分 蔗糖六斤六兩并塊

今勸。消盡无レ實。 胡桐律十八斤

石塩八斤四兩 狷皮二枚大半

新羅羊脂十二兩三分 防葵十六斤二分

雲母粉一斤八兩并合子 蜜陀僧六斤六兩并壺

戎塩八斤八兩二分 金石陵六斤七兩二分

石水氷廿四斤十兩并壺 内藥一斤一兩一分并裹

狼毒卅八斤一兩并袋及壺 治葛卅一斤十五兩一分并壺

已上目錄。

第一赤七染綾槻厨子収納

御書廿五卷 雜集一卷 孝經一卷 頭陀寺碑文并  
樂毅論杜家一卷 樂毅論一卷  
大小王書共半 紙背面一卷

王羲之書法廿卷

金作小刀一口

斑犀偃鼠皮御帶一條

御刀子六口 金銀莊

御袋一口 盛阿梨卅六顆  
雜小玉四十九

斑貝鞆御帶一條

十合鞆御刀子一口

赤紫黑紫縹緞御帶一條

三合鞆御刀子三口

水角鞆御刀子一口

犀角鞆御刀子三口

錦御袋一口 納麝香九兩二分

裏衣香五袋 重五斤十五  
兩二分

笏三枚 一牙 一通天牙  
一大魚骨

尺六枚 二紅牙撥鏤 二綠牙撥鏤  
二白牙

紅牙撥鏤算子一百枚

犀角坏二口

雙六頭一百十七具一隻

雜玉雙六子一百九十六枚

念珠四具 一水精 一虎魄  
一紫琉璃 一碧琉璃

貝玦拾二箇

金銅作唐刀子二口

百索縷一卷

尺八四箇 一玉 一竹  
一樺纏 一刻雕

### 第二赤七槻木厨子收納

犀角一具 二隻連底重太四斤  
十四兩一分上品

白犀角一枚 長三尺二寸七分重太  
六斤十兩二分上品 「以十三年九月十日返収」「鈴」

犀角一枚 長二尺 重三  
斤六兩上品

「鈴」「生」斑犀一枚 長七寸重太一斤  
十三兩二分中品 「鈴」「以延曆十三年四月廿七日依官牒。進内裏」

白石鎮子十六箇 師子形  
牛等形

銀平脱合子四合 納碁子  
六百枚

### 第一櫝收納

「依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏十劑二「鈴」麝香廿一劑 重廿二兩二分  
并袋及裏中品 「依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏卷杖。重二斤十三兩」犀角三箇  
一重二斤十三兩 一重一斤  
十五兩 一重一斤十兩一分

犀角器一枚 重十二兩  
二分 破

朴消七斤二兩二分 并袋

葵椀二斤十四兩二分 并袋  
中品

小草二斤四兩 并袋  
中品

(紙繼目)

樺撥根三斤三兩 并袋

胡椒一斤十二兩二分 并袋

寒水石十一斤三兩 并袋

阿摩勒九兩三分 并袋

奄摩羅十五兩二分 并袋

黑黃連二斤十三兩三分 并袋

元青一管 重五兩并管  
中品

青箱草一斤十五兩二分 并袋

白皮九斤四兩二分 并袋

理石三斤一兩二分 并袋

禹餘糧一斤十一兩二分 并袋

大一禹餘糧二斤十二兩 并袋

龍骨五斤九兩一分 并袋

五色龍骨七斤八兩 并袋

白龍骨四斤十四兩三分 并袋

龍角九斤四兩二分 并袋

五色龍齒廿四斤 并袋

似龍骨石廿六斤四兩 并袋

雷丸五斤十四兩二分 并袋

鬼臼七兩 中品

青石脂六兩 并袋

赤石脂七斤二兩 并袋

紫鑛五十七斤十二兩 并袋

第二橫収納「依十三年四月廿七日官牒、進内裏百廿丸」〔鈴〕

鍾乳床五斤一兩 并袋

檳榔子二百九十八枚 中品

〔依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏四兩〕〔鈴〕

宍縱容十斤五兩 并袋。虫

巴豆十七斤四兩 并袋。虫

无食子八百九十枚 中品

厚朴十四斤八兩二分 并袋

遠志十九斤八兩 并袋

呵梨勒四百四十枚 中品

第三橫収納

八角鏡二面 重太四十八斤八兩  
徑二斤一寸七分

八角鏡一面 重太十四斤十五兩  
徑一尺四寸七分

八角鏡二面 重大十三斤十五兩  
徑一尺四寸五分半

(紙繼目)



圓鏡一面 重太四十三斤八兩  
徑一尺五寸八分

第四橫収納

桂心一袋 重廿七斤十五兩  
中品

第五橫収納

桂心二袋 重一百六十斤四兩二分  
中品

第六橫収納

芫花三袋 重八十二斤六兩二分  
虫喫中品

第七橫収納

芫花二袋 重七十八斤五兩二分  
虫喫中品

第八橫収納

芫花三袋 重九十九斤十四兩三分  
虫喫中品

第九橫収納

人參二袋 重八十一斤并袋  
喫虫下品

第十橫収納

塵四十五斤

人參二袋 重一百廿四斤八兩  
虫喫下品

〔依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏百斤〕〔鈴〕

第十一橫収納

浅香一村 重太四十三斤五兩

第十二橫収納

〔依延曆十三年四月廿七日官牒、進内裏佰斤〕〔鈴〕

太黄二袋 重三百五斤七兩  
虫喫上品

塵十三斤二兩

第十三橫収納

（紙雜目）

八角鏡一面 重太五斤一兩  
徑一尺一寸

八角鏡一面 重太四斤三兩  
徑一尺

圓鏡一面 重太三斤七兩  
徑九寸

圓鏡一面 重太三斤十三兩  
徑九寸一分

八角鏡一面 重太四斤二兩  
徑九寸六分

圓鏡一面 重太三斤十二兩  
徑九寸一分

圓鏡一面 重太六斤一兩  
徑一尺二寸五分

圓鏡一面 重太一斤五兩  
徑一尺二寸五分

第十四橫収納

太黃二袋 重二百五十五斤一兩一分  
虫喫上品

第十五橫収納

臈蜜二袋 重二百七十四斤三兩二分  
并袋

第十六橫収納

臈蜜二袋 重二百卅五斤三兩二分  
并袋

第十七橫収納

八角鏡一面 重太六斤一分  
徑一尺七分

八角鏡一面 重太五斤一兩二分  
徑一尺一分

圓鏡一面 重太四斤十五兩  
徑九寸二分

八角鏡一面 重太三斤四兩  
徑九寸二分

八角鏡一面 重太五斤十三兩  
徑一尺一寸三分

圓鏡一面 重太四斤十二兩  
徑九寸三分

八角鏡一面 重太四斤十兩一分  
徑一尺二分

圓鏡一面 重太六斤五兩  
徑一尺七分

第十八橫収納

甘草二百八十四斤十兩二分

塵十一斤十兩

第十九橫収納

甘草二百九十六斤十兩二分「依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏百斤」〔鈴〕

第廿橫収納

芒消一百十八斤十兩二分 并袋及中品

(紙繼目)

「依延曆十三年四月廿七日官牒。進内裏」〔鈴〕

紫雪八斤十兩 中品并壺

胡桐律十八斤 中品并壺

石塩八斤四兩 并坑中品

狷皮二枚大半 中品

新羅羊脂十二兩三分

防葵十六斤二分 中品并壺

雲母粉一斤八兩 并合子

蜜陀僧六斤六兩 并壺

戎塩八斤八兩二分 并壺

金石陵六斤七兩二分 并壺

石水氷四斤十兩 并壺

内藥一斤一兩一分 并裹

第廿一横収納

狼毒卅八斤一兩 上品并袋及壺

治葛卅一斤十五兩一分 中品并壺

第廿二横収納

白練綾大枕一枚

御軾二枚

紫檀木画夾纈軾一枚

金薄綵絵木鞘大刀子一口

人勝二枚

第廿三横収納

御袈裟九領 納革篔三口

一領刺納樹皮色 九條

一領褐色紬 七條  
金網智三藏袈裟

一領織成樹皮色 七條

六領刺納樹皮色 七條

第廿四横収納

木画紫檀碁局一具 局裏藏碁子壺

銀董<sup>(蓋)</sup>炉一口

銀平脱梳箱一合 盛琴箏琵琶等紋

木画紫檀双六局一具

玫瑰箸二双

胡磁子一口 銀画

第廿五橫収納

銅鉢四口

第廿六橫収納

禮服御冠二箇一箇巨羅金銀寶珠飾。著黒紫組纒二條。納赤七八角小櫃一合。敷帛帳一條。布帳一條。緋地錦覆一條。緋網一條。

一箇以鈍金鳳并金銀葛形寶珠莊。著白線組緒二條。納赤柒六角小櫃一合。帛綾褥一枚、帛裕覆一條。鐵鎖子二隻

第廿七橫収納

禮服御冠二箇禮冠一箇。有旒。以雜玉飾。凡冠一箇。以雜玉飾。 納赤柒小櫃一合、敷帛帳一條。布帳一條。緋網二條、居机、

第廿八橫収納

帛裕袍一領

襖子二領一絮綿一裕

汗衫一領

褶一腰羅襪

袴一腰絮綿

御帶一條

袷子二條各二副

帛綾裕袍一領

單衣一領

絮綿褶一腰羅襪

單幘子一條三副

合香二斤十二兩太納帛袋

納赤柒文槻木小櫃一合牙床足著銀鎖子 緋地錦覆一條

敷帛帳一條 布帳一條

緋繩綱一條

第廿九橫収納

青両面褥一床

緑繩三副帳一條

第卅小櫃収納

青斑鎮石十廷御杖刀二口納細長櫃 紫檀五絃琵琶一面螺鈿

(紙繼目)

(紙繼目)

御床二枚

紫檀琵琶二面 一螺鈿

御畳二枚 錦端

紫檀阮咸一面 螺鈿

琴二面 一銀平  
一文一柒

桐木琴一面 木画

楸木瑟一面 木画

新羅琴二面 金鏤

檜木倭琴二面

甘竹簫一口 虫喫

吳竹笙一具

吳竹竿一口

彫石横笛一口

彫石尺八一口 析

記書五卷 一珍寶記 一種々藥記 一書屏風并氈等記  
一書屏風記 一猷大小王真跡記

屏風一百四帖 廿一雜画 四書 三鳥毛 一鳥形  
六十五夾額 十臆額

四帖書 二帖王羲之諸牒書

三帖山水畫

一帖唐國圖

一帖大唐勤政樓前觀樂圖

三帖大唐古様宮殿畫

一帖古様山水畫

三帖古様本草畫

一帖古様宮殿騎獵

三帖古人畫

一帖舞馬

一帖子女

二帖素畫夜遊

一帖鳥毛篆書

一帖鳥毛立女

一帖鳥毛暈成文書

(紙繼目)

一帖鳥書

一帖百濟畫

一帖古人宮殿

十二帖山水夾額

七帖奄室草木鶴夾額

(紙繼目)

十二帖麟鹿草木夾纈

五帖鹿草木夾纈

九帖鳥木石夾纈

一帖鷹木夾纈

二帖鳥木夾纈

二帖鷹鳥夾纈

一帖鷹鶴夾纈

四帖古人鳥夾纈

十帖鳥草夾纈

十帖臈纈

右。被<sub>二</sub>大政官<sub>一</sub>今月一日符<sub>二</sub>備<sub>一</sub>。被<sub>二</sub>右大臣<sub>一</sub>去五月廿

(原紙)

九日宣<sub>二</sub>備<sub>一</sub>。奉<sub>レ</sub>勅。爲<sub>下</sub>曝涼<sub>中</sub>在<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>香藥<sub>上</sub>。宜<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>

件人等<sub>一</sub>者。仍依<sub>二</sub>宣旨<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>知<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>。聽<sub>中</sub>使

處分<sub>上</sub>。其少僧都玄憐及三綱。与<sub>レ</sub>使共加<sub>二</sub>檢校<sub>一</sub>者。

謹奉符旨。曝涼如<sub>レ</sub>件。謹解。

延曆十二年六月十一日

使從四位上守宮内卿兼行因幡守勳六等石上朝臣「家成」(目表以下同)

從五位下行官奴正大春日朝臣「淨足」

外從五位下行内藥侍醫兼佑勳十一等廣海連「男成」

正六位上行中監物紀朝臣「福足」

僧綱少都傳燈法師位「玄憐」

威儀師傳燈法師位「幸榮」

(紙繼目)

三綱上座傳燈法師位「憬鈿」

寺主傳燈法師位「意行」

都維那傳燈法師位「隆瑞」

(紙權目)

(異筆)  
合三通 一通進内裏 一通在御藏 一通  
造案 収三網 所

〔正倉院文書〕 北倉173 ○御物納目散帳 第3紙 (大日古二十五ノ附88)

(新標外題)

〔明治廿七年勅集〕

御物納目散帳

(中略)

(第)  
第廿四横收納

(應)  
董爐一口 銀平脱梳箱一合 盛琴箏琵琶等絃

珮瑰箸二雙 胡瓶子一口 銀畫

木畫紫檀碁局一具 局裏藏碁子壺

木畫紫檀雙六局一具

延曆十二年六月九日

(後筆)

〔右舊収在後集第四拾八卷〕

〔正倉院文書〕 北倉164 ○弘仁二年勅物使解 (大日古二十五ノ附71ノ86)

延暦十二年六月十日勘帳

去延暦十二年曝涼使等檢帳

〔新撰外題〕  
〔弘仁二年九月廿五日資財勘録 一卷〕

〔前略〕

雙六頭一百十五具 以去延暦十二年六月十日勘帳所欠二具一隻

〔中略〕

右。被<sub>レ</sub>太政官今月七日符<sub>レ</sub>傳。為檢彼寺資財

并官物。差<sub>レ</sub>件人等。充<sub>レ</sub>使發遣。寺國承知。聽<sub>レ</sub>

使處分<sub>レ</sub>者。今使等依<sub>レ</sub>去延暦十二年曝涼使

等檢帳。用并所<sub>レ</sub>遺官物。勘録申送如<sub>レ</sub>件。謹解。

弘仁二年九月廿五日

使從五位下行図書助藤原朝臣〔浄本〕<sub>〔自署〕</sub>

〔後略〕

○香藥を曝涼せむがため宮内卿らを東大寺に遣はしむこと本月一日條參照。

十九日〔丙寅〕五位已上に錢を賜ふ。

〔類聚國史〕卷第七十八 賞宴下 賞賜

十二年六月丙寅。賜<sub>レ</sub>五位已上錢<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>差。

〔紙繼目〕



二十二日(己巳) 炎旱、日を経る。

〔日本紀略〕 前篇十三

己巳。炎旱經日。

○祈雨せしこと、本月八日條參照。

二十三日(庚午) 諸國をして新宮の諸門を造らしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚午。令<sub>下</sub>諸國<sub>上</sub>造<sub>中</sub>新宮諸門。云々。

〔拾芥抄〕 中 宮城部第十九(前田育徳會尊經閣文庫藏)

或書

或書云。延曆十二年正月甲午。遣<sub>三</sub>使於<sub>三</sub>山背國葛野宇太村地。爲<sub>レ</sub>遷<sub>レ</sub>都也。始造<sub>三</sub>山背新宮。同年六月庚午。令<sub>三</sub>諸國造<sub>三</sub>新宮諸門。尾張美濃二國。造<sub>三</sub>殷富門。伊福部氏也。越前國。造<sub>三</sub>美福門。壬生氏也。若狹越中二國。造<sub>三</sub>安嘉門。海犬耳氏也。丹波國。造<sub>三</sub>偉鑿門。猪使氏也。但馬國。造<sub>三</sub>藻壁門。佐伯氏也。播磨國。造<sub>三</sub>待賢門。山氏也。備前國。造<sub>三</sub>陽明門。若犬耳氏也。備中備後二國。造<sub>三</sub>達智門。丹治比氏也。阿波國。造<sub>三</sub>談天門。王手氏也。伊予國。造<sub>三</sub>郁芳門。達部氏也。

同十三年冬十月廿三日。天皇自<sub>三</sub>南京<sub>二</sub>遷<sub>三</sub>北京。

【參考】

〔續日本紀〕 卷第四十 桓武天皇 延曆十年九月甲戌條

甲戌<sub>(十六日)</sub>。仰<sub>二</sub>越前。丹波。但馬。播磨。美作。備前。阿波。伊豫等國。壞<sub>三</sub>運平城宮諸門。以移<sub>二</sub>作長岡宮。矣。

〔撰集秘記〕 (東山御文庫本? 西本昌弘論文、要確認)

弘仁陰陽式云。凡土牛童子等像。請內。大寒之日前夜半時。立<sub>二</sub>於諸門。一。大養。山二門各青色。壬生。大伴二門赤色。建部。伊福部。丹治比四門黃色。玉手。佐伯二門白色。海大養。猪。使二門黑色也。

〔撰集秘記〕 十二月（東山御文庫本）

大寒日。立<sub>三</sub>土牛童子像。（中略）

弘式云。懸犬養。山二門各青。壬生。大伴二門赤。建部。若犬養。伊福部。丹比四門黃色。玉手。佐伯二門白色。海

大養。（退）楮使二門黑色。貞式云。懸犬養門今案。無此門。。建部云々四門黃色。今案。建部爲青色。的爲黃色。退式云。陽明。待賢二門各

美福。朱雀二門赤。郁芳。皇嘉。殷富。達智四門黃。談天。藻壁二門白色。安嘉。偉鑿二門黑色。

〔延喜式〕 卷第十六 陰陽寮

凡土牛童子等像。請內。大寒之日前夜半時。立<sub>三</sub>於諸門。一。陽明。待賢二門各青色。美福。朱雀二門赤色。郁芳。皇嘉。殷富。達智四門黃色。談天。藻壁二門白色。安嘉。偉鑿二門黑色。立春之

日前夜半時。乃撤。

七月 大盡  
丁丑朔

一日(丁丑) 曲宴ありて、侍臣に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十五 歳時六 曲宴

秋七月丁丑朔。曲宴。賜侍臣衣。

七日(癸未) 馬埒殿に御して相撲を觀たまふ。

〔類聚國史〕 卷第七十三 歳時四 相撲

十二年七月癸未。御馬埒殿。觀相撲。

〔日本紀略〕 前篇十三

七月癸未。御馬埒殿。觀相撲。

【参考】

〔内裏式〕 中 七月七日相撲式

七月七日相撲式

神泉苑

先一日。所司供張神泉苑。御座東南八許尺。鋪皇太子座西面。又東南差去。鋪親王座及大臣以下非參議三位座並相對。親王西南。張相撲司幕於閣庭東西去閣各十許丈。左。閣東西一許丈。張五位以上幕各一字。次六位以下幕面。大臣已下東北面。右各三字。東西南。各一字。次大膳職幕各一字並重。當閣東階。南去六許丈。預置可立標之驗。又南去二丈許。立可著左司三仗旗之杓差當。標東。右司与此相對。此日早旦。乘輿御閣。衛仗服中儀服。警蹕侍衛如常儀。御饌并群臣饌等。弁備如五月節兩相撲司大夫酒器。各安其幕北頭。既内侍臨東檻喚大臣。大臣稱唯。於左近仗西頭謝座。昇自東階著座。次皇太子昇自同階。謝座謝酒著座。少時大臣喚舍人二声。舍人稱唯。少納言与大舍人共候。東瀧上橋頭。代之。趨立於中庭去閣四許丈。北面而立。

大臣宣。喚<sub>二</sub>大夫等<sub>一</sub>。稱唯。東出而喚之。大夫等稱唯、在<sub>レ</sub>西者遙應<sub>二</sub>在<sub>レ</sub>東者聲相共稱<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>東西釣臺邊<sub>一</sub>。入<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>相撲司幕之南<sub>一</sub>。即立<sub>二</sub>幕前<sub>一</sub>。北面。異位重行在<sub>レ</sub>東者。用<sub>レ</sub>西爲<sub>レ</sub>上。在<sub>レ</sub>西者。用<sub>レ</sub>東爲<sub>レ</sub>上。次六位以下入。立<sub>二</sub>相撲司幕後<sub>一</sub>。北上東面。稱唯拜謝。著<sub>レ</sub>座如<sub>レ</sub>常。訖左右相撲司。各在<sub>二</sub>東西正門外<sub>一</sub>亂聲。即共參入。且行且奏音聲。各近衛將監一人。將曹一人監曹分頭相對。下並同。次兵衛尉一人志一人。次衛門尉一人志一人。在<sub>二</sub>標前<sub>一</sub>。行至<sub>二</sub>閣庭<sub>一</sub>。北向而立。自<sub>二</sub>中央<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>標建之各去<sub>レ</sub>標南一許丈而立。訖退還。次相撲司大夫等。兩行參入行列之儀。以<sub>レ</sub>貴爲<sub>レ</sub>先。各當<sub>二</sub>幕前<sub>一</sub>。北向而立。即立<sub>二</sub>三丈旗<sub>一</sub>。訖左司先奏<sub>二</sub>厭舞<sub>一</sub>。訖大夫等著<sub>レ</sub>座。次右司奏<sub>二</sub>厭舞<sub>一</sub>。訖著<sub>レ</sub>座。即立合等各立<sub>二</sub>幕北頭<sub>一</sub>差西進也。右同亦相對。先出<sub>二</sub>占手<sub>一</sub>用<sub>二</sub>四尺以下小童。前一日。於<sub>レ</sub>內裏量<sub>レ</sub>長短。或。有<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>四尺者。當日不<sub>レ</sub>更令<sub>レ</sub>相撲。以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>負。奏<sub>レ</sub>名者。各座<sub>二</sub>幕前<sub>一</sub>。奏<sub>レ</sub>籌者各二人。座<sub>二</sub>其後<sub>一</sub>。占手勝則奏<sub>二</sub>亂聲<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>奏。最手勝則奏<sub>二</sub>亂聲及舞<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>斯之後。左右互奏<sub>レ</sub>舞。此日相撲人物廿番近衛兵衛人。白丁二人。日暮上下群臣。於<sub>二</sub>先拜處<sub>一</sub>拜退。次乘輿還<sub>レ</sub>宮。

## 八日相撲式

此日辰四点。御<sub>二</sub>紫宸殿<sub>一</sub>。衛仗服<sub>二</sub>當色<sub>一</sub>。御座饌并群臣座饌等。預弁備如<sub>レ</sub>常。事在<sub>二</sub>所司式<sub>一</sub>。先是近衛次將。令<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>長樂。永安兩門<sub>一</sub>。使<sub>二</sub>所司鋪<sub>一</sub>設之。殿庭東西。張<sub>二</sub>相撲人幕各二字<sub>一</sub>。雖<sub>二</sub>簷南向<sub>一</sub>。而相撲司座各東西面。此幕不<sub>レ</sub>設。親王座<sub>一</sub>訖左右近衛。開<sub>二</sub>承明門<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>常。相撲司等參入及立<sub>レ</sub>標如<sub>二</sub>七日儀<sub>一</sub>。近衛少將以上。先謝座謝酒。升著<sub>レ</sub>座。即相撲司等入<sub>レ</sub>列。立奏<sub>二</sub>厭舞<sub>一</sub>。訖著<sub>レ</sub>座。頃之有<sub>レ</sub>勅。喚<sub>二</sub>參議<sub>一</sub>。非參議三位以上。自<sub>二</sub>東階<sub>一</sub>上<sub>レ</sub>殿。日暮拜退及相撲之儀与<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>同。此日相撲廿番。近衛若兵衛十人。白丁十人。

十五日（辛卯）勅して、山背國雜色田を停め、口分田の都中に入る葛野郡百姓に班給したまふ。神田は便郡の田を以て充て、寺田は舊例に准へて充てず。

〔類聚國史〕 卷第五百五十九 田地上 口分田

十二年七月辛卯。勅。葛野郡百姓口分田。多入<sub>二</sub>都中<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>停<sub>二</sub>山背國雜色田<sub>一</sub>。班<sub>中</sub>給<sub>上</sub>百姓。其代於<sub>二</sub>四畿内<sub>一</sub>置。又神田。以<sub>二</sub>便郡田市充<sub>レ</sub>之。但寺田。准<sub>二</sub>舊例<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>充<sub>二</sub>其代<sub>一</sub>。

〔類聚國史〕 卷第百八十二 佛道九 寺田地

七月辛卯。勅。葛野郡百姓口分田。多入<sub>二</sub>都中<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>停<sub>二</sub>山背國雜色田<sub>一</sub>。班<sub>中</sub>給<sub>上</sub>百姓。其代於<sub>二</sub>四畿内<sub>一</sub>置。又神田。以<sub>二</sub>

便郡田市充<sub>レ</sub>之。但寺田。准<sub>二</sub>舊例<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>充<sub>二</sub>其代<sub>一</sub>。

○勅して京畿の百姓に田を班ち、男の分は令に依らしめたまふこと延暦十一年十月二十八日條参照。

十九日（乙未）大原野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

七月乙未。遊<sub>二</sub>獵于大原野<sub>一</sub>。

二十五日（辛丑）新宮を巡覽して、造宮使らに衣を賜ふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

辛丑。巡<sub>二</sub>覽新宮<sub>一</sub>。賜<sub>二</sub>造宮使及將領衣<sub>一</sub>。

○造宮省などを罷め、造宮省の雑色の匠手は才幹に随ひ木工・内藏等の寮に隸けたまふこと延暦元年四月十一日（『續紀史料』十九―32）、造宮職を官位を中宮職に准ぜしこと延暦十五年七月二十四日（日本後紀）條参照。

八月 大盡  
丁未朔

七日(癸丑) 蓮葉を翫びて宴飲し、樂を奏し祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

八月癸丑。翫蓮葉<sub>レ</sub>宴飲。奏<sub>レ</sub>樂賜<sub>レ</sub>祿。

〔日本紀略〕 前篇十三

八月癸丑。翫蓮葉<sub>レ</sub>宴飲奏<sub>レ</sub>樂。賜<sub>レ</sub>祿。

○光仁天皇が蓮葉の宴を設くこと寶龜六年八月十二日〔續紀史料〕十七―220條參照。

十日(丙辰) 京下諸山の葬瘞と、樹木を伐ることを禁ず。

〔類聚國史〕 卷第七十九 政理一 禁制

十二年八月丙辰。禁<sub>下</sub>葬<sub>上</sub>瘞<sub>上</sub>京下諸山<sub>上</sub>及伐<sub>上</sub>樹木<sub>上</sub>。

十四日(庚申) 大宰府官人の位祿・季祿の春米の運京を禁ず。

〔類聚三代格〕 卷第六 位祿季祿時服馬料事(前田家本、前田育徳會尊經閣文庫藏)

(龜頭朱書)

〔弘式〕

太政官符

一聽<sub>レ</sub>運<sub>二</sub>位祿季祿料米<sub>一</sub>事

右。得<sub>二</sub>大宰府解<sub>一</sub>符。謹檢<sub>二</sub>太政官去神護景雲二年七月廿八日符<sub>一</sub>符。得<sub>二</sub>府解<sub>一</sub>符。五位國司及帶<sub>レ</sub>國諸司官人等官人款云。所<sub>レ</sub>賜位祿并季祿料春米。上<sub>レ</sub>京欲<sub>レ</sub>資<sub>二</sub>親族<sub>一</sub>者。府檢<sub>二</sub>辭狀<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申。仍請<sub>二</sub>官裁<sub>一</sub>者。官判依<sub>レ</sub>請者。

延暦十二年八月十四日符

謹依<sub>二</sub>符旨<sub>一</sub>。行亦久矣。而依<sub>二</sub>太政官去延暦十二年八月十四日符旨<sub>一</sub>。亦同禁斷。資養之徒。因<sub>レ</sub>之亦憂。府司商量。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>申。仍請<sub>二</sub>官裁者。符旨灼然。所<sub>レ</sub>禁有<sub>レ</sub>限。而共從<sub>二</sub>禁斷<sub>一</sub>。府官所<sub>レ</sub>失。宜<sub>二</sub>依<sub>レ</sub>舊聽<sub>レ</sub>之。以前。(藤原氏色)右大臣宣。奉<sub>レ</sub>勅。如<sub>レ</sub>件。

大同四年正月廿六日

○大宰府の解により、五位國司・國を帶ぶ諸司官人らの位祿・季祿料の春米を京に上り親族に資さしむこと神護景雲二年七月二十八日〔續紀史料〕十五―77 條參照。

十六日(壬戌)任官あり。

〔日本紀略〕前篇十三

壬戌。任官。

二十一日(丁卯)大原野に遊獵したまふ。還りて南園に御し、五位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

八月丁卯。遊<sub>二</sub>獵于大原野<sub>一</sub>。還<sub>二</sub>御<sub>二</sub>南園<sub>一</sub>。賜<sub>二</sub>五位已上衣<sub>一</sub>。

是夜、内舍人山邊春日・春宮坊帶刀舍人紀國、共に謀りて帶刀舍人佐伯成人を殺す。明くる日、事覺はれて春日ら逃隱し、帝大いに怒りて天下に募求したまふ。後に左衛士佐巨勢島人を遣して格殺せしむ。

〔類聚國史〕卷第八十七 刑法一 斷罪

八月丁卯。是夜。内舍人山邊真人春日。春宮坊帶刀舍人紀朝臣國。共謀殺<sub>二</sub>帶刀舍人佐伯宿祢成人<sub>一</sub>。明日事覺。春日等即逃隱。帝大怒募<sub>二</sub>求天下<sub>一</sub>。後伊豫國捕<sub>レ</sub>之。以聞。遣<sub>二</sub>左衛士佐從五以上巨勢朝臣嶋人<sub>一</sub>格殺<sub>上</sub>。或曰。春日等承<sub>二</sub>皇太子密旨<sub>一</sub>。

伊豫國に捕ふ  
皇太子の密旨を承る

二十三日（戊辰）在京中の濫行により、筑前國那賀郡人の三宅眞繼を本郷に逡送す。

〔類聚國史〕 卷第八十七 刑法一 斷罪

戊辰。逡送筑前國那賀郡人三宅連眞繼於本郷。莫聽入京。以其在京中。屢有濫行也。

二十四日（庚午）衛門府門部壬生年、西門に登り自ら絞死す。

〔日本紀略〕 前篇十三

庚午。衛門府門部壬生年。登西門自絞死。時人不知其故。

二十六日（壬申）車駕、京中を巡覽したまふ。藤原乙叡の園池に御し、四位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇巡幸

十二年八月壬申。車駕巡覽京中。御左京大夫從四位下藤原朝臣乙叡園池。賜四位已上衣。日暮還宮。

〔日本紀略〕 前篇十三

壬申。車駕巡覽京中。

二十八日（甲戌）葛野に遊獵したまふ。藤原繼繩の別業に御し、侍臣及び大臣の子弟に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

甲戌。遊獵于葛野。御右大臣藤原朝臣繼繩別業。賜侍臣及大臣子弟衣。

三十日（丙子）地、震ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十一 災異五 地震

十二年八月丙子。地震。



九月 小盡  
丁丑朔

二日(戊寅) 菅野眞道・藤原葛野麻呂らを遣して、新京の宅地を班給せしむ。

〔日本紀略〕 前篇十三

九月戊寅。遣<sub>下</sub>菅野眞道。藤原葛野麿等<sub>一</sub>。班<sub>中</sub>給新京宅地<sub>上</sub>。

七日(癸未) 大原野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

九月癸未。遊<sub>下</sub>獵于大原野<sub>一</sub>。

十日(丙戌) 詔して、見任の大臣・良家の子孫は三世已下の王を娶ることを許したまふ。藤原氏は殊に二世已下の王を娶ることを聽す。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙戌。詔曰。云々。見任大臣。良家子孫。許<sub>レ</sub>娶<sub>三</sub>三世已下王<sub>二</sub>。但藤原氏者。累代相承。攝政不<sub>レ</sub>絶。以<sub>レ</sub>此論之。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>同等。殊可<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>娶<sub>三</sub>二世已下王<sub>二</sub>者。云々。

〔日本紀略〕 前篇十三

丙戌。

二十二日(戊戌) 栗前野に遊獵し、便に伊豫親王の江亭に御す。親王・左衛士督藤原雄友ら奉獻し、親王と雄友の子弟に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

戊戌。遊<sub>レ</sub>獵于栗前野<sub>一</sub>。便御<sub>二</sub>伊豫親王江亭<sub>一</sub>。親王。左衛士督從四位下藤原朝臣雄友等奉獻。親王及雄友子弟賜<sub>レ</sub>衣。

○栗前野に遊獵し伊豫親王の莊に御したまふこと本年二月四日條參照。

二十四日(庚子) 瑞野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

庚子。遊<sub>レ</sub>獵於瑞野<sub>一</sub>。

十月 大盡  
丙午朔

一日(丙午)日、蝕することあり。

〔日本紀略〕 前篇十三

十月丙午朔。日有蝕。

六日(辛亥)四世王深草、父を毆つ。律に據るに斬にすべし。勅して、死を降し隱岐國に流したまふ。

〔類聚國史〕 卷第八十七 刑法一 配流

十二年十月辛亥。四世王深草毆父。據律合斬。勅。降死。流隱岐國。

〔日本紀略〕 前篇十三

辛亥。四世王深草毆父。據律合斬。勅降死流隱岐國。

【参考】

〔律〕 名例律 八虐

四曰惡逆。謂。毆<sub>レ</sub>及謀<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>祖父母。父母。殺<sub>レ</sub>伯叔父姑。兄弟。外祖父母。夫。夫之母。

〔律逸文〕 鬪訟律 (法曹至要抄・掌中抄)

凡<sub>レ</sub>詈<sub>レ</sub>祖父母祖母者。徒三年。毆<sub>レ</sub>祖父母父母者。皆斬。

和氣清麻呂の奏請により、能登國の墾田五十八町を神願寺に施入す。

〔類聚國史〕 卷第百八十二 佛道九 寺田地

十月辛亥。正四位下和氣朝臣清麻呂奏請能登國墾田五十八町施入神願寺。許之。

【参考】

〔類聚國史〕 卷第七十九 佛道六 諸宗

淳和天皇天長元年九月<sup>(二十七)</sup>壬申。以<sub>二</sub>高雄寺<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>定額<sub>一</sub>。并定<sub>二</sub>得度經業等<sub>一</sub>。正五位下行河内守和氣朝臣眞綱。從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言。臣聞。父構子終。謂<sub>二</sub>之大孝<sub>一</sub>。營<sub>二</sub>公猷<sub>一</sub>可。惟忠惟孝。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>順者也。昔景雲年中。僧道鏡。以<sub>二</sub>佞邪之資<sub>一</sub>。登<sub>二</sub>玄扈之上<sub>一</sub>。辱<sub>二</sub>僭<sub>一</sub>法王之號。遂懷<sub>二</sub>窺覲之心<sub>一</sub>。偏<sub>二</sub>邪幣於群神<sub>一</sub>。行<sub>二</sub>權譎於佞黨<sub>一</sub>。爰八幡大神。痛<sub>二</sub>天嗣之傾弱<sub>一</sub>。憂<sub>二</sub>狼奴之將興<sub>一</sub>。神兵尖<sub>レ</sub>鋒。鬼戰連<sub>レ</sub>年。彼衆我寡。邪強正弱。大神歎<sub>二</sub>自威之難<sub>一</sub>當。仰<sub>二</sub>佛力之奇護<sub>一</sub>。乃入<sub>二</sub>御夢<sub>一</sub>。請<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>勅。追<sub>二</sub>引臣等故考從三位民部卿清麻呂<sub>一</sub>。面宣<sub>二</sub>御夢之事<sub>一</sub>。仍以下<sub>二</sub>天位讓<sub>二</sub>道鏡<sub>一</sub>之事。令<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>大神<sub>一</sub>。清麻呂奉<sub>二</sub>詔旨<sub>一</sub>。向<sub>二</sub>宇佐神宮<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>時大神託宣。夫神有<sub>二</sub>大少<sub>一</sub>。好惡不<sub>レ</sub>同。善神惡<sub>二</sub>淫祀<sub>一</sub>。貪神受<sub>二</sub>邪幣<sub>一</sub>。我爲<sub>レ</sub>紹<sub>二</sub>隆皇緒<sub>一</sub>。扶<sub>二</sub>濟國家<sub>一</sub>。寫<sub>二</sub>造一切經及佛<sub>一</sub>。諷<sub>二</sub>誦最勝王經万卷<sub>一</sub>。建<sub>二</sub>伽藍<sub>一</sub>。除<sub>二</sub>凶逆於一旦<sub>一</sub>。固<sub>二</sub>社稷於万代<sub>一</sub>。汝承<sub>二</sub>此言<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>違失<sub>一</sub>。清麻呂對<sub>二</sub>大神<sub>一</sub>。誓云。國家平定之後。必奏<sub>二</sub>後帝<sub>一</sub>。奉<sub>レ</sub>果<sub>二</sub>神願<sub>一</sub>。粉<sub>レ</sub>骨殞<sub>レ</sub>命。不<sub>レ</sub>錯<sub>二</sub>神言<sub>一</sub>。還奏<sub>二</sub>此言<sub>一</sub>。遭<sub>二</sub>時不遇<sub>一</sub>。身降<sub>二</sub>刑獄<sub>一</sub>。遂配<sub>二</sub>荒隅<sub>一</sub>。幸蒙<sub>二</sub>神力<sub>一</sub>。再入<sub>二</sub>帝都<sub>一</sub>。後田原天皇寶龜十一年。敷<sub>二</sub>奏<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>。天皇感嘆。親製<sub>二</sub>詔書<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>行之間。遇<sub>二</sub>讓位之事<sub>一</sub>。天應二年又奏<sub>レ</sub>之。柏原先帝。即以<sub>二</sub>前詔<sub>一</sub>。普告<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>延曆年中<sub>一</sub>。私建<sub>二</sub>伽藍<sub>一</sub>。名曰<sub>二</sub>神願寺<sub>一</sub>。天皇追嘉<sub>二</sub>先功<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>神願寺<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>定額寺<sub>一</sub>。今此寺。地勢污穢。不<sub>レ</sub>宜<sub>二</sub>壇場<sub>一</sub>。伏望。相<sub>レ</sub>替<sub>二</sub>高雄寺<sub>一</sub>。以爲<sub>二</sub>定額<sub>一</sub>。名曰<sub>二</sub>神護國祚眞言寺<sub>一</sub>。佛像一依<sub>二</sub>大悲胎藏及金剛界等<sub>一</sub>。簡<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>眞言<sub>一</sub>。僧一七人<sub>上</sub>。永爲<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>。修<sub>二</sub>行三密法門<sub>一</sub>。其僧有<sub>レ</sub>闕。擇<sub>二</sub>有道行<sub>一</sub>。僧<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>之。又簡<sub>二</sub>貞操沙彌<sub>二</sub>七人<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>轉<sub>二</sub>讀守護國界王經及調和風雨成熟五穀經等<sub>一</sub>。晝夜更代。不<sub>レ</sub>斷<sub>二</sub>其聲<sub>一</sub>。七年之後。預<sub>二</sub>得度<sub>一</sub>。一則果<sub>二</sub>大神之大願<sub>一</sub>。二則除<sub>二</sub>國家之災難<sub>一</sub>者。勅。一代之間。每年聽<sub>レ</sub>度<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>。又備前國水田廿町。賜傳<sub>二</sub>二世<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>功田<sub>一</sub>者。入<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>充。果<sub>二</sub>神願<sub>一</sub>者。更延<sub>二</sub>二世<sub>一</sub>。自餘依<sub>レ</sub>請。

○同條、『類聚國史』卷第八十(佛道七 諸寺)・卷第八十二(佛道九 寺田地)にもあり。

延曆年中、私に伽藍を建  
つ  
神願寺  
定額  
高雄寺

〔類聚二代格〕 卷第二 一年分度者事 (前田家本、前田育徳會尊經閣文庫藏)

太政官符

應<sub>下</sub>以<sub>三</sub>高雄寺爲<sub>三</sub>定額<sub>二</sub>并定<sub>中</sub>得度經業等<sub>上</sub>事。

右。正五位下行河内守和氣朝臣眞綱等上表稱。昔景雲年中。僧道鏡。辱僭<sub>三</sub>法王之号<sub>一</sub>。遂懷<sub>三</sub>窺覲之心<sub>一</sub>。偏<sub>三</sub>邪幣於群神<sub>一</sub>。行<sub>三</sub>權譎於佞黨<sub>一</sub>。爰八幡大神。痛<sub>三</sub>天嗣之傾弱<sub>一</sub>。憂<sub>三</sub>狼奴之將興<sub>一</sub>。神兵交鋒。鬼戰連年。彼衆我寡。邪強正弱。大神歎<sub>三</sub>自威之難<sub>一</sub>當。仰<sub>三</sub>佛力之奇護<sub>一</sub>。乃因<sub>三</sub>御夢<sub>一</sub>請<sub>三</sub>使者<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>勅。喚<sub>三</sub>臣等故考從三位行民部卿清麿<sub>一</sub>。面宣<sub>三</sub>御夢之事<sub>一</sub>。仍以<sub>三</sub>天位<sub>一</sub>讓<sub>三</sub>道鏡之事<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>言<sub>三</sub>大神<sub>一</sub>。清麻呂奉<sub>三</sub>詔旨<sub>一</sub>。向<sub>三</sub>宇佐神宮<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>時大神託宣。夫神有<sub>三</sub>太少<sub>一</sub>。好惡不<sub>レ</sub>同。善神惡<sub>三</sub>淫祀<sub>一</sub>。貪神受<sub>三</sub>邪幣<sub>一</sub>。我爲<sub>レ</sub>紹<sub>三</sub>隆皇緒<sub>一</sub>。扶<sub>中</sub>濟國家<sub>上</sub>。寫<sub>三</sub>造一切經及佛<sub>一</sub>。諷<sub>三</sub>誦最勝王經一<sub>一</sub>万卷。建<sub>三</sub>伽藍<sub>一</sub>。除<sub>三</sub>凶逆於一旦<sub>一</sub>。固<sub>三</sub>社禊於萬代<sub>一</sub>。汝承<sub>三</sub>此言<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>遺失<sub>一</sub>。清麿對<sub>三</sub>大神<sub>一</sub>誓云。國家平定之後。必奏<sub>三</sub>後帝<sub>一</sub>。奉<sub>レ</sub>果<sub>三</sub>神願<sub>一</sub>。粉<sub>レ</sub>骨殞<sub>レ</sub>命。不<sub>レ</sub>錯<sub>三</sub>神言<sub>一</sub>。還奏<sub>三</sub>此言<sub>一</sub>。遭<sub>三</sub>時不遇<sub>一</sub>。身降<sub>三</sub>刑獄<sub>一</sub>。遂配<sub>三</sub>荒隅<sub>一</sub>。幸蒙<sub>三</sub>神力<sub>一</sub>。再入<sub>三</sub>帝都<sub>一</sub>。寶龜十一年。敷<sub>三</sub>奏此事<sub>一</sub>。天皇感嘆。親製<sub>三</sub>詔書<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>行之間。遇<sub>三</sub>讓位之事<sub>一</sub>。天應二年又奏<sub>三</sub>之<sub>一</sub>。柏原先帝。即以<sub>三</sub>前詔書<sub>一</sub>。普告<sub>三</sub>天下<sub>一</sub>。至<sub>三</sub>延曆年中<sub>一</sub>。私建<sub>三</sub>伽藍<sub>一</sub>。名曰<sub>三</sub>神願寺<sub>一</sub>。天皇追嘉<sub>三</sub>先功<sub>一</sub>。以<sub>三</sub>神願寺<sub>一</sub>爲<sub>三</sub>定額寺<sub>一</sub>。今此寺。地勢沙泥。不宜<sub>三</sub>壇場<sub>一</sub>。伏望。相<sub>三</sub>替高雄寺<sub>一</sub>。以爲<sub>三</sub>定額<sub>一</sub>。名曰<sub>三</sub>神護國祚眞言寺<sub>一</sub>。佛像一依<sub>三</sub>大悲胎藏及金剛界等<sub>一</sub>。簡<sub>下</sub>解<sub>三</sub>眞言<sub>一</sub>僧<sub>二</sub>二十七人<sub>上</sub>。永爲<sub>三</sub>國家<sub>一</sub>。修<sub>三</sub>行三密法門<sub>一</sub>。其僧有<sub>レ</sub>闕者。擇<sub>下</sub>有<sub>三</sub>道行<sub>一</sub>僧<sub>上</sub>補<sub>レ</sub>之。又簡<sub>三</sub>貞操沙彌<sub>一</sub>二十七人。令<sub>レ</sub>轉<sub>三</sub>讀守護國界王經及調和風雨成熟五穀經等<sub>一</sub>。晝夜更代。不<sub>レ</sub>斷<sub>三</sub>其聲<sub>一</sub>。七年之後。預<sub>三</sub>得度例<sub>一</sub>。一則果<sub>三</sub>大神之大願<sub>一</sub>。二則除<sub>三</sub>國家之災難<sub>一</sub>者。右大臣宣。奉<sub>レ</sub>勅。得度一代之間。每年聽<sub>レ</sub>度<sub>三</sub>一人<sub>一</sub>。自餘依<sub>レ</sub>請。

天長元年九月廿七日

十四日 (己未) 大安寺僧行秀に封五十戸を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第百八十五 佛道十二 僧封

桓武天皇延曆十二年十月己未。大安寺僧傳燈法師位行秀賜<sub>三</sub>封五十戸<sub>一</sub>。

十五日(庚辰) 地、震ふ。

〔類聚國史〕 卷第一百七十一 災異五 地震

庚辰。地震。

二十日(乙丑) 曲宴ありて、五位已上に祿を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊宴

十月乙丑。曲宴。賜五位已上祿<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>差。

是 月 雜載

〔長岡京木簡〕 長岡京木簡二

(八四四) 十二年十月十日

115×(8)×3 061

十一月 小盡  
丙子朔

二日 (丁丑) 新京を巡覽したまふ。藤原繼繩の庄に御し、五位已上に衣を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第七十八 賞宴下 賞賜

十一月丁丑。巡覽新京。御右大臣從二位藤原朝臣繼繩庄。賜五位已上衣。

〔日本紀略〕 前篇十三

十一月丁丑。巡覽新京。

五日 (庚辰) 葛野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十一月庚辰。遊獵於葛野。

十日 (乙酉) 交野に遊獵したまふ。藤原繼繩措衣を獻り、五位已上・命婦・采女らに給ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

乙酉。遊獵於交野。右大臣從二位藤原朝臣繼繩獻措衣。給五位已上及命婦采女等。

十二日 (丁亥) 大いに雪ふる。諸司雪を掃き、物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第百六十五 祥瑞上 雪

十一月丁亥。大雪。諸司掃雪。賜物有差。

○左大臣橘諸兄以下が元正太上天皇御在所の掃雪に供奉すること天平十八年正月是月〔續紀史料〕八一458 條參照。

二十六日(辛丑) 栗倉野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

辛丑。遊獵於栗倉野。



十二月 大盡  
乙巳朔

七日(辛亥) 太政官の曹に水鳥の入るを獲ふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

十二月辛亥。有<sub>二</sub>水鳥<sub>一</sub>。入<sub>三</sub>太政官曹<sub>二</sub>獲之。

十日(甲寅) 瑞野に遊獵したまふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

十二月甲寅。遊<sub>三</sub>獵於瑞野<sub>一</sub>。

十八日(壬戌) 勅して、長岡京の百姓に宅地價直の悔返をとどめたまふ。

〔日本紀略〕 前篇十三

壬戌。勅。長岡京百姓。宅地價直。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>悔返<sub>一</sub>。云々。

【参考】

〔法曹至要抄〕 下 處分(群書類従)

十一  
一 父母處分用後状事

戸令應分條云。若亡人存日處分證據灼然者。不<sub>レ</sub>用<sub>三</sub>此令<sub>一</sub>。喪葬令。身喪戸絶無親條云。若亡人存日處分證據分明者。不<sub>レ</sub>用<sub>三</sub>此令<sub>一</sub>。鬪訟律云。子孫違<sub>三</sub>犯教令<sub>一</sub>者。徒二年。又條云。告<sub>三</sub>祖父母父母<sub>一</sub>者。絞。說者云。死生亦同。

案<sub>レ</sub>之。父母教令。死生不<sub>レ</sub>變。承而可<sub>二</sub>周旋<sub>一</sub>。豈敢可<sub>二</sub>違犯<sub>一</sub>哉。然則數度雖<sub>二</sub>改易<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>最後状<sub>一</sub>。可<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>告言<sub>一</sub>理訴之道<sub>一</sub>也。

十二  
一處分子孫之物子孫死後不返領事

戸婚律云。祖父母父母在。而子孫別籍異財者。徒二年。若祖父母父母令別籍者。徒一年。子孫不坐。疏云。但云別籍。不云令異財者。明其無罪也。說者云。已異後不可悔還者。

案之。於父母之令異財者。受領之子孫。無有其罪。又已異後不可悔還。況子孫亡有妻子者。妻子可傳領。父母更不可返領之。

〔裁判至要抄〕（群書類從）

一處分子孫財。子孫死後。輒不返領事

戸婚律云。祖父母父母在。而子孫別籍異財者。徒二年。若祖父母父母令別籍者。徒一年。子孫不坐。說者云。

已異後不可悔還者。

按之。祖父母父母。以家地所領。讓与子孫之間。子孫死去之刻。或讓与其妻。或和与他人者。雖祖

父母。輒不可進退歟。

一處分有夫女子財。不悔還事

戸婚律云。祖父母父母令別籍者。子孫不坐。釋云。女子隨夫別籍者不坐。

按之。女子適夫家後。所讓与之財物。可爲夫之進止。婦同財以夫爲主之故也。仍父母更難進退。處分

有夫女子之財。輒不悔還。但未異財者。可悔還之。

一處外孫財。不悔還事

鬪訟律云。告祖父母父母者。徒二年。說者云。死生亦同。疏云。侵奪財物。或敲打其身之類。得自理訴。

按之。外祖父母父母。侵奪財物之時。既聽理訴。仍讓女子之子之財。輒不悔還。但不異財者。可悔

還之。

〔御成敗式目〕 (日本思想大系)

一讓与所領於女子後。依有不和儀。其親悔還否事

右。男女之號雖<sub>レ</sub>異。父母之恩惟同。爰法家之倫。雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>申旨<sub>一</sub>。女子則憑<sub>下</sub>不<sub>二</sub>悔還<sub>一</sub>之文<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>不<sub>二</sub>孝之罪業<sub>一</sub>。父母亦察<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>敵對之論<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>讓<sub>二</sub>所領於女子<sub>一</sub>歟。親子義絶之起也。教令違犯之基也。女子若有<sub>二</sub>向背之儀者<sub>一</sub>。父母宜<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>進退之意<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>之。女子者爲<sub>レ</sub>全<sub>二</sub>讓状<sub>一</sub>。竭<sub>二</sub>忠孝之節<sub>一</sub>。父母者爲<sub>レ</sub>施<sub>二</sub>撫育<sub>一</sub>。均<sub>二</sub>慈愛之思<sub>一</sub>者歟。

十九日 (癸亥) 岡屋野に遊獵したまふ。紀古佐美・紀木津魚奉獻し、侍臣已上に物を賜ふ。

〔類聚國史〕 卷第三十二 帝王十二 天皇遊獵

癸亥。遊<sub>二</sub>獵於岡屋野<sub>一</sub>。左大辨從三位紀朝臣古佐美。右兵衛督從四位下紀朝臣木津魚奉獻。賜<sub>二</sub>侍臣已上物<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>差。

是歲

雜載

〔公卿補任〕

延曆十二年桓武癸酉

右大臣 從二位 藤繼繩 中衛大將。皇太子傅。

大納言 正三位 同小黒麿 中務卿。皇后宮大夫。二月兼民部卿。

參議 從三位 神王 彈正尹。下總守。正月丙戌從三位。

紀古佐美 左大辨。春宮大夫。右衛門督。但馬守。正月從三位。

壹志濃王一六十 正月乙巳兼越前守。六月敍從三位。

從四位上 石川眞守 三月任太宰大貳。左京大夫。元右大辨。

從四位下 大中臣諸魚 近衛大將。伯。式部大輔。

藤雄友 大藏卿。左衛門督。

〔七大寺年表〕

延曆十二年癸酉

同帝

僧正善珠

大僧都賢璟 十月七日入滅。八十。〔考十下恐脫九〕法相宗。興福寺。勅移住西大寺。精進行人也。

少僧都行賀 興福寺別當 中律師善榮

律師善上 等 定二月廿日。任少僧都。

永忠 善藻

善 謝

施 曉二月廿日任。行基弟子。光信大徳弟子。法相宗。

傳教大師。建<sub>二</sub>立延曆寺<sub>一</sub>。今年。圓仁誕生。下野國人也。公家建<sub>二</sub>立東寺西寺<sub>一</sub>。施<sub>二</sub>入食封千戸<sub>一</sub>。弘法大師。年及<sub>二</sub>二十<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>和泉國榎尾山寺<sub>一</sub>。石淵勤操僧都爲<sub>レ</sub>師剃<sub>二</sub>除鬚髮<sub>一</sub>。受<sub>二</sub>沙彌十戒<sub>一</sub>。名號<sub>二</sub>教海<sub>一</sub>。其後自改稱<sub>二</sub>如空<sub>一</sub>。具足戒時。改曰<sub>二</sub>空海<sub>一</sub>。

〔東大寺要録〕 卷第五 別當章第七 (東大寺本、東大寺圖書館藏)

第九

律師禪雲 等定資 延曆十年任

寺務四年 同十 十一 十二 十三

〔東大寺要録〕 卷第六 末寺章第九 (東大寺本、東大寺圖書館藏)

東 寺

右。延曆十二年歲次癸酉。公家建<sub>二</sub>立東西兩寺<sub>一</sub>。施<sub>二</sub>入食封千戸<sub>一</sub>。弘仁十四年癸卯。以<sub>二</sub>東寺<sub>一</sub>永賜<sub>二</sub>空<sub>一</sub>和尚<sub>一</sub>。其後涉<sub>二</sub>東大寺真言院<sub>一</sub>廿一僧。爲<sub>二</sub>末寺<sub>一</sub>。

〔二代要記〕 桓武天皇 (改訂史籍集覽)

(延曆) 十二年癸酉。造<sub>二</sub>延曆寺并西寺<sub>一</sub>。

〔帝王編年記〕 卷第十二 桓武天皇 (國史大系)

是歲。傳教大師造<sub>二</sub>延曆寺<sub>一</sub>。

〔扶桑略記〕抄二 桓武天皇（國史大系）

<sup>（延曆）</sup>十二年。空海和尚及二十年。終於和泉國槇尾山寺。石淵僧都勸操爲師。剃除鬚髮。受沙彌十戒七十二威儀。名稱教海。其改如空。受具足戒時。改曰空海。佛前發願曰。吾從佛法。常求尋要。三乘五佛十二部經。心神有疑。未以爲決。唯願三世十方諸佛。示我不二法門。一心祈感。夢有入。告曰。於此有經。名字大毘盧遮那經。是乃所<sub>レ</sub>要也。即隨喜尋得件經王。在大日本國大和國高市郡久米道場東塔下。於此一部解<sub>レ</sub>緘普覽。衆情有<sub>レ</sub>滯。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>憚問。更作<sub>レ</sub>發心。遂<sub>レ</sub>入唐<sub>二</sub>已上<sub>一</sub>。本傳。

〔日本高僧傳要文抄〕弘法大師傳上（國史大系）

又云。延曆十二年。生年二十。石淵贈僧正送<sub>レ</sub>使招<sub>レ</sub>大師。相率發於和泉國槇尾山寺。剃頭授沙彌十戒七十二威儀。名號<sub>二</sub>教海<sub>一</sub>。後自改稱<sub>二</sub>如空<sub>一</sub>。彌發心勵<sub>二</sub>苦節<sub>一</sub>也。<sup>（後略）</sup>

〔御遺告〕（弘法大師伝全集）

初示成立由縁起第一

<sup>（中略）</sup>

或上<sub>二</sub>阿波大瀧嶽<sub>一</sub>修行。或於<sub>二</sub>土佐室生門崎<sub>一</sub>寂暫。心觀明星入<sub>レ</sub>口。虚空藏光明照來。顯<sub>二</sub>菩薩之威<sub>一</sub>。現<sub>二</sub>佛法之無<sub>二</sub>厭苦節也<sub>一</sub>。則嚴冬深雪被<sub>二</sub>藤衣<sub>一</sub>。而顯<sub>二</sub>精進道<sub>一</sub>。炎夏極熱斷<sub>二</sub>絕穀漿<sub>一</sub>。朝暮懺悔。及二十年。爰大師石淵贈僧正召率。發<sub>二</sub>向和泉國槇尾山寺<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>此剃<sub>二</sub>除鬚髮<sub>一</sub>。授<sub>二</sub>沙彌十戒七十二威儀<sub>一</sub>。名稱<sub>二</sub>教海<sub>一</sub>。其改<sub>二</sub>如空<sub>一</sub>。<sup>（後略）</sup>

〔今昔物語集〕卷第十一 弘法大師亘唐傳真言教歸來語第九（新日本古典文学大系）

延曆十<sub>二</sub>ト云フ年<sub>一</sub>。勸<sup>（勸）</sup>操僧正。使<sub>レ</sub>禎尾山寺頭<sub>レ</sub>剃<sub>レ</sub>十戒<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>ク。名<sub>レ</sub>教海<sub>ト</sub>云フ。  
年二十也。其後。亦。自<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>テ。如空<sub>ト</sub>云フ。<sup>（後略）</sup>

〔卷尾山縁起證文等之事〕 (大日本仏教全書)

一 石淵僧正精修練弘法大師除固羅事

(中略)

其後。或上<sub>二</sub>阿波大瀧嶽<sub>一</sub>。修<sub>一</sub>行虚空藏法<sub>二</sub>。大劔飛來。或於<sub>二</sub>土佐室戸崎<sub>一</sub>。念<sub>二</sub>求聞持法<sub>一</sub>。明星入<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>口。時延曆十二年<sub>酉</sub>。生年二十歳。石淵僧正下<sub>レ</sub>使呂所率<sub>二</sub>(百廿)<sub>一</sub>。發<sub>一</sub>向和泉國卷尾山寺。剃<sub>二</sub>除鬚髮<sub>一</sub>。受<sub>二</sub>沙彌十戒十二威儀<sub>一</sub>。名稱<sub>二</sub>教海<sub>一</sub>。其改<sub>二</sub>如空<sub>一</sub>。

(中略)

御出家延曆十二年<sub>癸酉</sub>。正平拾五年<sub>庚子</sub>。五百七十七年也。御入定承和二年<sub>乙卯</sub>。當年迄五百廿六年也。

○空海が沙彌となりしこと、「贈大僧正空海和上傳記」・「圓澄大師受法之師付傳」(朝野群載)卷第十六・佛事上)では、延曆十七年二十五歳の時とす。

〔諸寺縁起集〕 法華八講縁起 (大日本仏教全書)

延曆十二年癸酉歳柏原天皇御宇。見<sub>レ</sub>剋<sub>二</sub>是山邊寺<sub>一</sub>。寂<sub>二</sub>師之寫<sub>一</sub>。修<sub>二</sub>八講<sub>一</sub>。剋<sub>二</sub>之石淵寺<sub>一</sub>。(中略) 勲操以<sub>二</sub>去天長四年五月四日<sub>一</sub>入滅。從<sub>二</sub>延曆十二年<sub>癸酉</sub>始行<sub>二</sub>八講<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>于寛弘七年<sub>二</sub>(百脱カ)十九年<sub>一</sub>。

○石淵寺の法華八講、『元亨釋書』卷第二の勲操傳は延曆十五年始修とす。

〔長岡京跡出土木簡〕 東院西外郭跡 (木簡研究二三・長岡京跡左京北一條三坊二町)

・ 延曆十二年

・ [ ]

76.5×(3)×8 081

〔秋田城跡出土木簡〕 東院西外郭跡 (木簡研究二九・秋田城出土文字資料集Ⅱ 56号)

・ □□□□<sub>(郡カ)</sub> 楠五斗□□□□<sub>(採抄前カ)</sub>

・ 延曆十二年□月廿一日□□□長

(127)×23×4 033